

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Cultural Anthropological Study of Subsistence Activities with Special Focus on Indigenous Hunting, Fishing and Gathering in the Arctic Regions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003944

文化人類学的生業論

—極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に—

岸 上 伸 啓*

A Cultural Anthropological Study of Subsistence Activities with Special Focus
on Indigenous Hunting, Fishing and Gathering in the Arctic Regions

Nobuhiro Kishigami

文化人類学では、狩猟採集や園耕、牧畜、農耕などの食糧生産を生業活動としてカテゴリー化し、社会を分類することが行われてきた。本論文では狩猟採集をめぐって「生業」概念や研究アプローチがどのように展開されてきたかを整理、検討する。そのうえで、極北地域の先住民の生業活動の特徴およびイヌイットのシロイルカ猟を検討することを通してイヌイットの狩猟漁撈採集活動にかかわる生業モデルを提案する。イヌイット型（もしくは北極型）の生業では、捕獲から加工・処理、分配・流通、(廃棄)、消費、廃棄へといたる一連の活動系とそれに関連する儀礼の活動系からなり、その2つの活動系には、①行動的側面、②社会的側面、③技術・道具的側面、④イデオロギ的側面、⑤知識的側面が存在している。すなわち、生業活動とは、この2つの活動系とそれらに関連する文化的・社会的・物質的要素からなる経済システムである。このモデルは、特定の社会的な脈絡の中で狩猟採集活動を調査する視点を提供するのみならず、比較研究に利用することができる。

As subsistence activities, food production systems such as hunting and gathering, horticulture, pastoralism and agriculture have been used to classify and characterize human societies in cultural anthropology. In this paper, the author first discusses several meanings of the concept “subsistence” or “subsistence activity” and the development of anthropological approaches to hunting and gathering as a subsistence activity. He then proposes a model of Inuit subsistence by examining the characteristics of arctic hunter-gatherer subsis-

*国立民族学博物館先端人類科学研究部

Key Words : anthropological studies, subsistence activities, hunter-gatherers, hunting, fishing, arctic regions, subsistence model

キーワード : 人類学的研究, 生業活動, 狩猟採集民, 狩猟, 漁撈, 極北地域, 生業モデル

tence activities, including beluga whale hunting. In this model of Inuit subsistence activities, there is a series of activities such as harvesting, processing, sharing/distribution, consumption and disposal, in addition to various types of ritual or ceremonial corresponding to these activities. Each of these activities has behavioral, social, technology/tool, ideological and knowledge aspects. That is, subsistence activities are economic systems consisting of several associated cultural, social and material aspects. This definition or model of a subsistence activity may be useful in conducting research on hunting and gathering activities in a particular social context and in comparative studies of hunting and gathering activities in human societies.

1 問題提起	4.2 カナダ極北地域における生業活動としてのシロイルカ猟の場合
2 文化人類学における「生業」概念について	4.2.1 活動系としてのシロイルカ猟
2.1 「生業」の一般的用法と法的用法, 文化人類学における用法	4.2.2 シロイルカ猟と食料資源
2.2 狩猟採集社会研究者による定義	4.2.3 シロイルカ猟と技術・物質文化
2.3 諸定義の共通性と差異	4.2.4 シロイルカ猟と環境的知識
3 狩猟採集社会研究と先住民研究における生業と生業活動	4.2.5 シロイルカ猟と社会関係
3.1 生態人類学的アプローチ	4.2.6 シロイルカ猟と世界観
3.2 様式論的アプローチ	4.2.7 シロイルカ猟とハンターの意識
3.3 先住民の生業活動に関する研究	4.2.8 生業活動とイヌイット社会, 国家, 国際社会
3.4 生業研究の争点	4.2.9 生業と毛皮交易
4 北アメリカ極北地域における生業活動の特異性と生業モデル	4.2.10 シロイルカ猟からみたイヌイットの生業活動の特徴
4.1 北アメリカ極北先住民の生業研究と生業の位置づけ	4.3 シロイルカ猟を基にした極北型生業モデルの提案とその活用
	5 結語

1 問題提起

人間が生きていくためには食糧の採取や生産が不可欠である。文化人類学（民族学）が成立した19世紀後半から多くの研究者は、進化論的な視点から個々の人類社会の基盤をなす食糧採取・生産活動を指標として、人類社会を狩猟採集社会や園耕社会、牧畜社会、農耕社会へと分類してきた。さらに初期の文化人類学がこれまで研究対象としてきた社会の多くは市場経済以前の社会や市場経済から相対的に独立した自給自足的な社会であったために、それらの社会の経済活動はサブシステンス活動（subsistence activities）と呼ばれることになった。

近年、このサブシステンスに基づく社会のカテゴリー化や概念は、野蛮な狩猟民と文明化した農耕民という社会進化的な考え方に由来しており、人類学や考古学において有効な概念でありえるのかという疑問が呈され、生業以外の社会文化的な特徴や差異を考案して社会を記述する方法を見つけ出す必要が叫ばれている（Pluciennik 2001）。このように狩猟採集社会などの概念そのものの有効性に疑問を投げかける研究もあるが、本論文ではこの問題には立ち入らず、可視的であり、あまりにも当然である活動であるため、これまでほとんど理論的に検討されてこなかった狩猟採集活動というサブシステンス活動を研究の対象とする（Ellen 1994: 197）。サブシステンスは生業や生存と訳されることがあるが、本稿では、とりあえず生業と訳し、文脈に応じて生存と表記することにしたい。

本論文の目的は、狩猟採集社会研究においては生業がどのように取り扱われてきたのか、そして現在の狩猟採集民や先住民を研究するうえでの生業の意義を検討することである。そのうえで、北アメリカの極北地域に住むイヌイットやイヌピアット、ユピートなどの狩猟漁撈採集活動の特徴を基にして現代の狩猟採集民の現状や社会変化を研究する手段となる生業モデルを提案する。

2 文化人類学における「生業」概念について

本節では、生業という概念が、社会一般や法律、文化人類学の分野においてどのような定義で使用されているかを概観する。その後で、狩猟採集社会に関する人類学的研究においてどのように定義されているかを、類型をたてて整理しながら、検討する。

2.1 「生業」の一般的用法と法的用法，文化人類学における用法

最初に，生業とは何かについて代表的な定義を，一般的な用法，法的な用法，文化人類学的な用法に分けて見てみたい。

英語のサブシステンスは，たとえば、『ランダムハウス英和辞典』によると，1. 生存，存続，生きていくこと，2. 存在，実在，実存，3. 扶養，（動物の）飼養，4. 暮らし，生計（living, livelihood），5. 食物・生活必需品の出所を意味する。また，日本語の「生業」は，たとえば、『広辞苑』によると，「生活のためのわざ，生活に必要なわざ，なりわい，すぎわい」を意味する。

次に，アメリカやカナダでは法律のうえで，生業はどのように使用されているかを簡単に紹介しておきたい。1975年に締結された「ジェームズ湾および北ケベック協定」や1993年に締結された「ヌナヴート協定」には，「生業」や「生業活動」という用語は使用されていない。それにほぼ相当する言葉として，収穫（穫）（harvesting）が使用されている。たとえば，「ジェームズ湾および北ケベック協定」の24.1.13によると，収穫とは「先住民族が，個人やコミュニティのためにもしくは毛皮交易や漁業などの商業目的で，保護動物以外の野生動物種を対象として行う狩猟，漁撈およびワナ猟」（Québec 1991: 360）であると規定されている。この場合には，毛皮を売り，現金を稼ぐことを目的としたホッキョクギツネ猟やアザラシ猟は，ケベックのイヌイットの収穫権として認められていることになるが，「生業」や「生業」の権利とは表現されていない（Québec 1991: 361–367）。

アメリカ合衆国のアラスカ州では，「生業」という概念に州法と連邦法では異なる定義が付与されている（Case and Voluck 2002: chapter 8）。1978年のアラスカ州生業法（the State Subsistence Act）では，生業とは，「アラスカ内の……野生の再生可能資源の慣習的かつ伝統的な利用」のことでであると定義されている（Kancewick and Smith 1991: 663）。一方，1980年の連邦政府のアラスカ国益土地保全法（the Alaska National Interest Land Conservation Act，略称 ANILCA）では，生業は，「個人的もしくは家族が消費する目的で野生の再生可能資源をアラスカの遠隔地居住者が慣習的かつ伝統的に利用すること」と定義されている（Kancewick and Smith 1991: 646）。しかしながら，これらの州法と連邦法の定義には，野生の再生可能資源の利用が先住民族に特定されていないこと，さらに最低限度の経済的な保障（minimal economic security）という意味合いを含んでいるという共通点が認められる（Lee 2002: 5）。モリー・リーは，アラスカの先住民自身は生業のことを土着の文化的価値である分配に基づく集団の権利

であると考えているが、非先住民（アメリカ社会の主流派の人々）は生業とは食事の最低限の必要性を満たすことであると考えており、両者の考えの間には大きなギャップがあることを指摘している（Lee 2002: 3）。

次に、サブシステムや生業やそれに関連する用語について、アメリカにおける文化人類学の代表的な入門書ではどのように使用されているかを見てみよう。ここで入門書の定義を取り上げるのは、入門書では学界で認められている概念や理論、仮説が紹介される傾向があるからである。

生態人類学者のモーランは、生業とは使用するためのものを生産する一形態を意味することや、食糧供給のような生存に不可欠であることを意味することがあると指摘している（Moran 1982: 336）。生業活動を、人々が必要不可欠とするものを獲得し、生産するために援用する戦略のことであると定義する研究者もいる（Howard 1986: 102）。

オタバインは、生業技術（subsistence technology）とは、「生計をたてることを目的に自然環境に適応し、開発するために遂行する活動」と定義している（Otterbein 1977: 44）。一方、エンバー夫妻は、生業技術とは「人間が食料を生産するために使用する方法」と定義している（Ember and Ember 1988: 497）。ボックは、生業（subsistence）とは食料を入手するための諸技法であり（Bock 1974: 277）、食料収集（狩猟、漁撈、採集）と食料生産（園耕、農耕、牧畜）に分類できると考えている。

キージングは、生業経済（subsistence economy）とは、食料やそれ以外の生活の物理的な手段が生産され、消費される技術的な過程と（それに関係する）社会関係であると定義している（Keessing 1976: 568）。ビールスらは、輸出するためのものをほとんど生産しない、もしくは食糧や住居、道具がほとんど自給的な社会の経済を生業経済と呼んでいる（Beals, Hoijer and Beals 1977: 714）。

以上の定義から、生業とは生存に必要な食料獲得の（1）技術ややり方、戦略、（2）形態や活動、（3）社会経済システム、（4）自給自足的な経済の意味で使われていることが分かる。すなわち、文化人類学において多用されている「生業」という概念の意味には、多少の幅が認められる。

2.2 狩猟採集社会研究者による定義

イヌイトやサンのような狩猟採集民の狩猟採集活動は生業活動であると呼ばれることが多いが、狩猟採集社会を研究している人類学者の大半は、生業活動とは何かを厳密に定義をすることなく、生活の糧を入手する狩猟や漁撈、採集の活動を生業活動

と呼んできたといえるだろう。また、サブシステム活動を広義に定義し、生存活動の意味で使用している研究者もいる。たとえば、チペワイアンのカリブー猟を研究した煎本は、後述する渡辺仁（1977a）の枠組みを利用しながら、食料獲得活動だけではなく、生存に不可欠な、食料加工活動、食料消費活動、住居設営活動、生皮処理活動、製作活動、探索活動、育児活動、儀礼活動、遊び活動、睡眠・休息活動をサブシステムの諸活動と呼んでいる。煎本の場合は、サブシステム活動とは、生存活動を指している（Irimoto 1981: 100）。

しかしながら、何人かの研究者は、生業についてより詳細な定義を行なっている。ここでは、代表的な定義を、市場（貨幣）経済との関連での定義と社会関係や文化的な価値観との関連での定義に大別して紹介する。

進化生態人類学者のスミスは、生業とは交換のために財を生産するのではなく、通常、生産者の世帯内で消費される財を生産することであると指摘している。そして純粋な生業経済とは、すべての生産が生業生産である自給自足的な閉じた経済システムのことをさすが、そのような単純な経済システムは現存していないので、便宜的に「市場の制度体や貨幣という手段を介して財が交換されない経済のこと」を生業経済と呼んでいる（Smith 1991: 394）。

市川は、人間の経済のおもなプロセスは（1）資源の採取、（2）財の生産、（3）財の消費、（4）残余物の廃棄という1連の系から成り立っていると指摘したうえで（市川 1997: 136）、生業経済と市場経済を対照させながら、生業経済の特徴を浮き彫りにさせている。市川によると、生業経済とは生計のための経済であり、市場経済とは市場での交換を前提に生産と流通が行なわれているような経済であるという（市川 1997: 140-141）。これを表にすると次のようになる。

表1 生業経済と市場経済の違い

生業経済	市場経済
「使用のための生産」	「交換のための生産」
「使用価値獲得のための交換」	「利潤を求める交換」 （商品連鎖の一環を構成するような交換）

ここでは、生業と市場が明確に区別されている。

池谷は、生業活動とは「人類が生存のために不可欠な食料獲得や物を生産したり交換する活動」（池谷 2002: 17）として定義したうえで、田中（1984: 186）の生業様式の定義に従い、生業活動は、技術、活動、集団の3つの要素から構成されていると指

摘している（池谷 2002: 17）。池谷はサンの事例をもとに、現金獲得のための活動も生業経済の中に入れるという立場をとり、自家消費を目的とした狩猟を「生業狩猟」と商品生産のための狩猟を「商業狩猟」と呼んで区別している。口蔵ら（1997）も、生業（形態）の中に販売を目的とする換金作物の栽培を含めて論じている。

ウェンゼルのサブシステムの概念が「最小限」や「人間の生活を維持させる限界点」を意味すること、場合によっては、「個体が必要なすべてのものを個体が生産し、消費するプロセス」のことを意味しているという一般的な用法に言及したうえで、イヌイットのサブシステムに関しては、物質の生産に限定されて認識され、かつ自給自足的な側面が強調されてきたと批判している（Wenzel 1991: 57-58）。ウェンゼルの生業とは、狩猟民の経済関係を日常的な生活へと社会的に統合する文化的な価値であると独自の定義を行なっている（Wenzel 1991: 57）。また、ウェンゼルやローナーは、イヌイットの生業とは社会経済システムであるという議論（Lonner 1980; Wenzel 1991: 57-60）を展開しているが、これについては本論文の後半部で検討するため、ここではこれ以上、述べない。

アラスカ先住民のトリンギットを調査研究してきたドムブロウスキーは、さらに広範な定義を「生業」に対して与えている。彼によれば、生業とは食料獲得の実践のみならず、実践の中で必然的に必要となり、実践によって生み出される諸関係、これらの関係が作り出す感情や気分、言説からなると定義している（Dombrowski 2007: 212）。ウェンゼルの見解同様、この定義では、実践にかかわる諸関係がひとつの重要な要素となっている。

スチュアートは、生業をエレンやウェンゼルの定義（Ellen 1988: 133-134; Wenzel 1991: 57-60）にしたがって、「天然資源を獲得・処理して消費する諸活動とそれに伴う社会関係」と定義している（スチュアート 1996: 126）。そのうえで、スチュアートは、ワナ猟などの現金収入を伴うような活動でも、「伝統的」な生活様式を維持するためにその利潤が活用されている活動は、商業的な資源活用とは区別して、生業活動の中に入れていく。

私が知る限り、「生業活動」を研究の対象として多角的かつ総合的に研究した研究者は、スチュアート（本多俊和）である（スチュアート 1996; 本多 2005）。本多（スチュアート）は、生業活動とは獲物を殺して食べるという単純な活動ではなく、世界観と深くかかわっていると指摘し、それは5つの要素を包摂していると述べている（本多 2005: 82）。5つの要素とは、次のとおりである。

要素1 入手：生活に必要な物資を獲得する。

要素2 処理：物質を使える形にする。

要素3 消費：獲得した物資を食べたり，使ったりする。

要素4 廃棄：不要になったものを処分する。

要素5 社会関係：獲物と人間の社会的な関係をめぐる儀礼など。

この生業活動に関する定義は，これまでの定義の中ではもっとも体系的であるといえる¹⁾。

2.3 諸定義の共通性と差異

文化人類学の分野では，生業は狩猟や牧畜，農耕のような生産の一形態（「生存の手段」）とみなされることが多かったが（Leed 1976），これまで見てきたように「生業」や「生業活動」については，明確な定義が存在していないことが判明した。すなわち，生存や食料を獲得することという単純な定義から社会経済システムまでさまざまな定義が存在している。

狩猟採集社会研究においては，サブシステム活動を狩猟採集活動や生生活動と定義する研究者が大多数である。また，市場経済との関係や社会関係・価値観との関係から生業を定義しようとする研究者もいる。市場経済との関係から生業活動を定義する場合には，「生業活動」に現金獲得活動をふくめたりする立場と市場経済に直接かわらない自家消費的な活動と定義する立場のふたつに大別される。また，社会関係・価値観との関係から生業を定義しようとする場合には，生業活動を社会経済システムやより包括的な文化システムとして定義する立場がある。

以上のような傾向が見られるが，生業活動に関しては多様な定義が存在していることを確認しておきたい。

3 狩猟採集社会研究と先住民研究における生業と生業活動

ここでは生態人類学的アプローチによる狩猟採集社会研究や，その後に展開されてきた先住民の狩猟採集活動に関する研究において生業や生業活動がどのように研究されてきたかを検討したい。

人類の狩猟や漁撈，採集などの食料獲得活動については技術や道具に関する研究が多数行われてきたが（たとえば，オズワルト 1983），エレンは「生業」に関してはあまりにも具体的な活動であり，可視的であるため，生業活動自体を理論的に研究することはほとんど行われてこなかった点を指摘している（Ellen 1994: 197）。その例外

は、(1) 生業と環境適応の関係を解明しようとした生態人類学的研究、(2) 生業の様式論、(3) 生業と先住民の関係に関する文化人類学的研究である。

3.1 生態人類学的アプローチ

生態学的なアプローチの代表的な研究は、ジュリアン・スチュワードが提案した文化生態学である。スチュワードは、生生活動と経済編成にもっとも関係の深い一群の特徴的な要素を「文化の核」と呼んだ。この文化の核は、生生活動や経済編成と密接に関係している社会や政治、宗教のパターンも含んでいる（スチュワード 1979: 37）。文化生態学では3つの手順を踏む。第1段階では、開発技術や生産技術と環境の相互関係が分析されることになる。狩猟採集社会の研究では、生存の工夫、すなわち狩猟や漁撈のための道具、採集や貯蔵用の容器、輸送手段、水資源、燃料資源、衣服、住居など「物質文化」と、それらを製作し、利用する技術が分析の対象となる。当該の社会の成員が、どのような物質や技術を用いて環境を開発し、資源を獲得してきたかが、記述・分析される。第2段階では、特定の地域の開発（資源の獲得と利用）においてどのような特定の技術が利用されており、どのような行動パターンが取られているかが、分析・記述される。第3段階では、その特定の資源の獲得と利用に関係する行動パターンが、人口や居住パターン、親族構造、土地に対する諸権利など文化のほかの諸局面にどのような影響を及ぼしているかを調査し、記述・分析することになる。このような手順を踏むことによって、特定の環境に適応してきた個々の文化とその変化を理解できるのである（スチュワード 1979: 41-44）。生態人類学者の田中二郎は、次のように述べている。

「とくに食物獲得のための集団・活動・技術などは生業様式と総称される。この生業様式は、人口構造・社会組織・文化的体系などの結節点であることが多い。とくに、自然環境からの影響を直接的にこうむりやすい狩猟採集民・遊牧民・焼畑農耕民などの自給自足的な単純社会では、生活様式に、食物の獲得とその消費に関する社会・文化的特性が集約されている場合が多い。」（田中 1984: 186）。

渡辺仁（1977a）は、独自の生態学的なアプローチを主唱した。渡辺は、生活は相互に関連する種々の活動からなる活動系であり、生物個体が外界に適応するためのメカニズムであると考えた。彼の問題意識は、この生活と環境との関係を生活の立場（側）から解明することであった（1977a: 6-7）。彼は、生活（活動系）に関するキュービクモデルを提唱する。彼のいう生活とは、まさに生物個体が生存するための諸活動からなるシステムであり、生存システムである。この生活を構成する生生活動に

は、(1) 食物獲得活動, (2) 住居設営活動, (3) 身体保護活動, (4) 防御活動, (5) なわばり活動, (6) 生殖活動, (7) 遊び活動, (8) 探査活動, (9) 休息と睡眠, (10) 儀礼的活動, (11) 審美的活動がある。各活動には、1) 運動的な側面, 2) 道具的な側面, 3) 通信的な側面, 4) 社会的側面がある。さらにこの生活(活動系)には、時間的な構造があり、日周期、年周期、生涯周期の3種に区別できる(渡辺 1977a: 11-19)。渡辺は、これらの諸活動を通してどのように生物個体が環境に適応し、生存しているかを研究する。

渡辺の研究アプローチがほかの生態人類学的なアプローチと異彩を放つ点は、環境概念である。渡辺が注目する環境は、客観的な物理的な環境ではなく、「主体的環境」である。環境とは、なんらかの主体があつてそれを取りまく要因として存在する、主体あつての環境である。すなわち、主体的環境とは、環境主体の認知する世界であり、個体の活動を条件づける環境のことである(渡辺 1977a: 23-24)。そして人間の主体的環境は、物質的側面、超自然的側面、審美的側面からなり、人間はそれぞれへの適応の手段として技術的活動、儀礼的活動、審美的活動をとる(渡辺 1977a: 25-26)。

渡辺は、この理論的な視点をとりながら、アイヌの生態系に関する研究を行った(渡辺 1977b; Watanabe 1972, 1973, 1994)。その結果、アイヌは物質的な環境に特定の生業活動をもって、食料を調達し、適応する一方、カムイの住地であり活動領域である超自然的な環境には、クマ祭りやサケ祭りのような送り儀礼によって適応を試みてきたことを指摘した。さらに、この技術的・儀礼的活動系は、社会組織によってバックアップされている、という全体的な基本構造を提示した(渡辺 1977b: 400-404)。渡辺の一連の研究は、広義の生存活動(システム)を取り扱っているが、この中の食物獲得活動のことを生業活動や生計活動と呼んでいる(渡辺 1977b: 396)。

生業活動およびそれに関係する諸要素と所与の環境との適応的な関係に着目する文化生態学的なアプローチは、アフリカや極北地域の狩猟採集社会の研究に援用され、多大の成果を挙げてきた(田中 1984; 渡辺編 1977)。その一方で、環境との適応的關係が強調されるこのアプローチは、グローバル化が進展し、自然環境とともに所与の社会と外部との政治・経済的關係が重要な要因として作用している現代の世界における狩猟採集社会の研究においては、その限界も指摘されている(岸上 2007a)。

佐々木史郎は、東アジアにおける毛皮獣狩猟や毛皮交易の歴史と現状を詳細に研究することを通して、その地域の狩猟採集社会が自然環境のみならず、コミュニティー間の結びつきや、国家などの巨大な外部勢力との政治経済的な関係によって左右されてきたことを明らかにしてきた(佐々木 1996)。彼は、狩猟採集社会が「自己完結的

で閉鎖的で、柔軟性や発展性に欠け、貨幣経済などの外界からの刺激にもろくも崩れていく」というイメージのもとで、所与の自然環境への適応という視点のみから研究されてきたことを指摘し（佐々木 2002a: 6-9）、狩猟採集社会を外界に開かれたシステムとして把握し、より開放的で、環境適応の変数だけでなく、社会適応の変数をも取り入れたモデルを構築することの必要性を主張している（佐々木 2002a: 14; 佐々木 2002b: 12; 佐々木編 2002a, 2002b）。

近年、日本ではロシア（旧ソ連）のシベリアや沿海州地域の狩猟採集研究が盛んになり、ソ連時代やポストソ連時代の狩猟活動に関する研究蓄積が飛躍的に増加しつつある（たとえば、佐々木 1998, 2002a, 2002b; 佐藤編 1988; 田口 2002）。また、日本のマタギやアイヌの狩猟活動やそれに関連する交易や儀礼に関しても新たな知見が提出されつつある（たとえば、池谷 2005; 池谷・長谷川編 2005; 田口 1992, 1994, 1999; 手塚 2005; 出利葉 2002）。これらの研究では、所与の自然環境のみならず、外部社会との政治経済的な関係（交易関係など）に着目し、開かれた社会として狩猟採集社会が取り扱われている。

3.2 様式論的アプローチ

マルクス主義的なアプローチをとるリーコックとリーは、狩猟採集社会に独自の生産様式が存在しているかどうかという問題提起を行なった（Leacock and Lee 1982）。リーコックらは、世界中のバンド生活を営んでいるさまざまな採捕社会（foraging societies）においては分配の平等主義的パターン、根強い反権威主義、個人の独立性が重んじられるとともに協調が重視されていること、バンドの成員や居住場所についての顕著な流動性、子育てにおける子供の甘やかし、葛藤の解決、集団の連帯性を生み出すやり方には、共通性が存在しているので、採捕の生産様式（foraging mode of production）が存在しているのではないか、という問題提起をした（Leacock and Lee 1982: 7-9）。そのうえで、予備的なリストとしながらも、これらの社会に共通する生産関係（relations of production）として、生産手段の集団的な所有、婚姻のつながりや訪問、共同で生産に参加することによって得られる他の人々の諸資源に互恵的にアクセスする権利、蓄財に重きをおかないこと、一般化された互酬性に基づく分配、すべての人が（道具など）生産力にアクセスしていること、道具の個人的な所有の6つの事例を挙げている（Leacock and Lee 1982: 8-9）。これらの見解は、採捕の生産様式（foraging mode of production）の存在の可能性を示唆するものである。

生産様式とは、生産力の所与のセットと生産の社会関係のシステムが接合して構成

されている。言い方を変えれば、生産様式は、生計を立てる手段とそれに関連する社会関係からできている。リーコックらは狩猟採集社会における狩猟採集は技術にすぎず、生産力の一部を形成しているにすぎないので、狩猟採集は生産様式ではないという結論に達している (Leacock and Lee 1982: 7)。彼らは、狩猟採集は技術にすぎないと考えている点を強調しておきたい。

狩猟採集活動は生産様式であるのかいなか、さらに様式 (mode) として認識されるかどうかについては、その後、インゴールドやエレン、バード=デイビッドらによる検討がなされた。

インゴールドは、リーコックとリーが提起した採捕の生産様式 (foraging mode of production) が、狩猟民や採集民の行動を記述するのに妥当な概念であるのか、さらに生産様式 (mode of production) と生業様式 (mode of subsistence) の概念を吟味している (Ingold 1988)。

採捕 (foraging) とは、行動生態学においてすべての種類の動物が自然環境から生活の糧を引き出す物理的な動きを指す概念として広く使用されている。一方、狩猟採集 (hunting and gathering) は、人間による意図的な社会活動であり、生産であるとインゴールドは主張する。すなわち、狩猟採集は生業行動のパターンであるだけでなく、生活の糧を生産するやりかたである。狩猟採集にかかわる社会関係は、自己としての人びとを結び付けているので、相互主観的にかかわっている関係もしくは相互性にもとづく関係である。そしてその社会関係は、狩猟採集の実際の諸活動を構成し、特徴づけているのである (Ingold 1988: 276)。したがって、インゴールドは、狩猟採集と採捕を明確に区別し、人間による狩猟採集は生産様式であると主張する (Ingold 1988: 273)。

インゴールドによると、生業様式は使用される生業技術の範囲を意味するという (Ingold 1988: 279)。彼は、採捕のような協同的な相互作用は生業様式の一側面であり、バンドとは本質的に協同 (cooperation) の単位であると主張する。すなわち協同や採捕は、生態学的な関係である。一方、狩猟採集は意図的な社会的行為であり、分配は、すなわち相互に対面的にかかわる関係は社会関係であるという。この社会関係は、狩猟採集活動の責任や産物の分配のやり方を規定するので、狩猟と採集は生産様式であるという。これを表で示せば、次のような関係になる。

表2 狩猟採集と採捕の違い

狩猟採集 (hunting and gathering)	採捕 (foraging)
生産様式 (mode of production)	生業様式 (mode of subsistence)
分配	協同
社会的関係・社会的行為	生態学的関係・生態学的相互作用

インゴールドは、生業様式と生産様式を、採捕と狩猟採集にそれぞれ対応させ異なるものであると考えている。したがって、生業様式は狩猟民や採集民の行動を記述するための概念としては問題があること、生産様式は生業様式以上の存在であること、前者と後者の大きな違いは、前者には「バンド生活」をめぐる社会関係の存在であることを指摘している。

エレンは、生業様式と生産様式の関係を吟味している (Ellen 1988, 1994)。エレンは、狩猟や農業のような生計をたてる主要な手段は、道具や技術的知識の寄せ集めにすぎないのか、それともひとつの生業様式として理論的に概念化することができるのかを問題とした。エレンによると、生業様式とは、ある特定の間集団と特徴づける採取プロセスの集合からなる所与の社会的現実を抽象化した概念であり (Ellen 1988: 133, 1994: 198)、そして道具や技術に還元することができないものであるという (Ellen 1988: 133)。エレンは、すべての生業様式は、社会的および生態学的な関係の特定の網の目の中に埋め込まれているので、そのようなすべての網の目は、歴史的、進化論的な空間に位置づけられた特定の生産様式として概念化することができるのかもしれないと主張している。そして、生業様式は、その網の目の社会的に決定された構造の一部としてのみ理解されうると考えている (Ellen 1988: 133–134)。

これまでの議論を要約しておきたい。リーコックやリーは、バンド社会に共通する社会的特徴が複数存在しているので「採捕の生産様式」の存在の可能性を否定はしていないが、狩猟採集は技術にすぎず、生産様式ではないと主張している。エレンは、狩猟採集は生産様式の生産力に属する一部分であり生産様式ではないが、技術以上のものであり、生業様式のひとつであると主張している。一方、インゴールドは、狩猟採集は生産様式であると主張している。彼らの主張には、一長一短があり、現在でも平行線のままである。アフリカの熱帯雨林や砂漠地域、南アメリカの多雨林、ユーラシアや北アメリカの寒冷地域の狩猟採集社会では、生業資源と人間との関係の持ち方が明確に異なっている事実が存在しているので、生業様式論であろうが生産様式論であろうが、同じ範疇に属する様式としてひとつくりにされた諸事例に多様性がある点を認識するべきである (松井 2007: 337)。

インゴールドやエレン、リーコックらの流れとは別に、文化論的な視点から狩猟採集に関する生業のあり様（様式）を論じたのは、バード＝デイビッドであった。彼女は、1980年代以降の狩猟採集社会において狩猟採集だけで生計をたてている社会は存在せず、さまざまな生業を組み合わせながら生計を営んでいる事実に着目し、狩猟採集社会に関する独自の生業様式論を展開した（Bird-David 1992b）。

バード＝デイビッドは、南インドのナヤカの人々が森の中で狩猟や採集を続けるとともに、プランテーションやオフィスで働いたり、時には交易や農耕、牧畜に従事していたりすることに着目した。彼女は、ナヤカの人々がご都合主義で仕事を選択しているのではなく、狩猟採集民の生業様式を反映したやり方で生きていると考え、生業様式論を展開した。

バード＝デイビッドによると、現代の狩猟採集民の生業の選択のあり方は、自然環境に関する生態学的知識、柔軟性、資源バイアスの3つの要素によって関係づけられているという（Bird-David 1992b: 39）。狩猟採集民は、自然が父母や親戚のように食料や物資を提供すると考えており、生業活動に関係深い生態学的知識を保持している。さらに彼らは、柔軟にかつ積極的に自然環境とかわりつつ、すでに存在している資源を手に入れるために人々は活動しているという。したがって、狩猟採集民が、異なる生業活動を組み合わせて従事するのは、環境が与えてくれる諸資源を上手に入手するための手段を選択した結果であると考えている。

そしてバード＝デイビッドは、このような現代の狩猟採集民の生業様式は、4つの相互に関連する特性をもっていると指摘している。第1の特徴は、資源獲得活動への自律的な従事である。すなわち個人や家族単位で、状況や機会に応じて、資源を獲得する手段（生業）を自律的に選択している。第2の特徴は、生業活動に通時的な変異が認められる点である。生業の選択が、日々もしくは月ごとに、年々、世代ごとに変化することである。選択された生業には、通時的に見ると多様性と柔軟性が認められる。第3の特徴は、生業活動の共時的な多様性である。しばしば、多様な生業手段が地域社会内、親族集団内、村内、世帯内などさまざまなレベルの社会集団内で同時に選択され、実施されている。第4の特徴は、狩猟や採集の連続的な存在である。特定の個人は、ある時点において狩猟や採集以外の生業に従事しているかもしれないが、2つのやり方でその社会では狩猟や採集が継続されている。第1に、常時ではないにしても大半の成人が時折、狩猟や漁撈に従事していることによってである。第2に、彼ら自身が狩猟や漁撈に従事しない時には、彼らの親族や友人の何人かがそれらの活動に従事している。したがって、共時的にも通時的にもその社会には狩猟や採集が継

続して存在していることになる。このモデルを通して、現代の狩猟採集民の生業活動を見ると、独自で、変異のある生業様式が存在していることが分かる。

狩猟や採集、牧畜、農耕などの生業としてのあり方について、世界各地から多様な生業活動が組み合わされている実態や歴史的にその組み合わせが変化してきた実態が報告されている（秋道 2007）。ロシア（旧ソ連）のシベリアに住む少数民族グループの生業については、生業文化類型論が展開されてきた（高倉 2008; 松園 1962）。佐々木史郎は、アムール川下流とサハリンにおける 19 世紀から 20 世紀初頭の経済文化類型を、生態学的な条件のみならず、中国など東アジア世界との政治経済的な関係を考慮にいれながら、精緻化した。その結果、同地域には、(1) 漁撈、森林狩猟、家畜飼育を伴う農耕、野生植物採集を組み合わせた文化、(2) 漁撈、森林狩猟、海獣狩猟、野生植物採集を組み合わせた文化、(3) 漁撈、森林狩猟、トナカイ飼育、海獣狩猟、野生植物採集を組み合わせた文化、(4) 漁撈、森林狩猟、野生植物採集を組み合わせた文化が存在しているということを提示した（佐々木 1991, 1992; Sasaki 1994）。

ラップランドのサミを研究した葛野は、ウツヨキ・サミの多くは、トナカイ飼育以外のサケ漁撈、ライチョウの狩猟、キイチゴの採集などで生計を立てざるをえず、彼らの適応戦略はこれら 4 つの生業活動の四位一体的な構造にあると報告している（葛野 1992: 218, 221）。また、日本統治時代の資料を用いて台湾先住民の狩猟を研究した野林は、彼らの経済状況は狩猟採集と農耕の複合体であることを例証している（野林 2002）。

アフリカのボツワナ地域のサンを研究してきた池谷は、歴史的に見ても、現時点で見ても、サンが歴史的におかれた状況によっては、狩猟や採集以外の農耕や家畜の飼養に従事したり、商業目的の狩猟に従事したりしている事実に基づき、生業の中に農耕牧畜を含める生業複合の視点の重要性や商品経済の影響の重要性を指摘している（Ikeya 1993, 1996a, 1996b; 池谷 1996, 2002, 2007）。

これらの事例は、世界各地において生業複合が存在していたことを示しており、バード＝デイビッドの現代の狩猟採集民の「生業様式論」を支持していると考えられる。

ここでは、狩猟採集社会研究における「生業活動」や「生業様式」に関する理論的展開を整理した²⁾。

3.3 先住民の生業活動に関する研究

1998 年に国立民族学博物館で開催された第 8 回狩猟採集社会会議（the Eighth

Conference on Hunting and Gathering Societies) の基調講演において、リチャード・リーは、狩猟採集社会研究を、(1) 伝統的な研究 (Classic), (2) 進化生態学的研究 (Adaptationist), (3) 修正主義的研究 (Revisionist), (4) 先住民の立場に立った研究 (Indigenist) に大別した (Lee 1999)。そして狩猟採集社会研究の流れのひとつは、1990年代から狩猟採集民を先住民として研究することや、先住民としての狩猟採集民の諸権利を擁護する研究の増加であることを指摘した。この傾向は、カナダやアメリカ合衆国、ニュージーランド、オーストラリアの狩猟採集社会に関する研究に顕著に認められる。そして最近では、アフリカや中南米の狩猟採集社会研究にも先住民の諸権利や先住民運動を前面にだす研究が増加し始めた (たとえば、Hitchcock, Ikeya, Biesele and Lee eds. 2006)。

ここでは、先住民研究との関係から狩猟採集社会の生業活動に関する代表的な研究を紹介し、検討する。

カナダのイヌイット、ファースト・ネーションズ、メイティやオーストラリアのアボリジナル (アボリジニ)、ニュージーランドのマオリ、アメリカ合衆国のイヌピアットやユピート、グイッチンらの社会や文化は、狩猟採集民としてではなく、国家の中で生活を営む先住民族として研究される傾向が、最近、とみに顕著である。

たとえば、スチュアート (1996) は、カナダ・イヌイットの現代の狩猟採集活動の意義について多角的に検討している。イヌイットにとって1960年代以前には食糧を確保するための活動であった生業活動には経済効果はまだあるにしても、その活動自体がレクリエーション化している点を指摘している (スチュアート 1996: 132, 140; 本多 2005: 81, 93)。また、国家によって生活が保障されている現代のイヌイットにとっては、イヌイット独自のアイデンティティーを象徴するものとしての生業活動に比重が移り、獲物を捕ることよりも、活動そのものを行なう象徴性が重要になっている点を指摘している (スチュアート 1996: 147; 本多 2005: 81, 93)。

カナダ北西準州のホルマンで調査を行ったスタンは、イヌイットにとって狩猟や採集は重要な食料源であるが、カナダ南部から搬送されてくる食品を入手できるようになったことや食事の嗜好が変化してきたことから、カンントリー・フードの重要性は以前と比べれば低下していると指摘している。さらに、イヌイットの若者の間では生業離れと生業のレジャー (レクリエーション) 化が進んでいることや生業が生存のための手段としてよりもイヌイットとしてのアイデンティティーを自覚し、維持する手段となっていることを指摘している (Stern 2000)。

生業活動が先住民族の生存というよりも、アイデンティティーの維持と深くかか

わっているという指摘は、ボツワナの定住地に住むサンの場合（池谷 2002: 256）や北欧の先住民民族サミの場合（葛野 1997: 214）でも指摘されている。

岸上（2007b）は、現金のインプットによってのみ実施が可能となる現在の北アメリカ極北先住民の狩猟漁撈活動について、アラスカのイヌピアットのホッキョククジラ鯨を事例として検討を加えた。国際捕鯨委員会によって捕獲制限が課せられ、イヌピアットはアメリカ合衆国政府とクジラ資源の共同管理をしながら捕鯨を続けている。捕獲されたクジラのマツタックや肉、内臓の総量はカロリー摂取の点から見ると、現在のイヌピアットの人々の生存に不可欠であるとは必ずしもいえないが、ホッキョククジラの捕獲や肉の分配・流通、消費は、イヌピアットにとっては、食料資源の入手のみならず、民族表徴、アイデンティティーの維持、世界観やジェンダー関係の再生産、社会関係の維持・再生産、健康の維持の諸効果があることを指摘した（岸上 2007b: 126-128）。この事例から、現代の先住民にとっては、捕鯨と獲物の捕獲、消費などいわゆる生業活動は、単なる食糧を入手し、消費する活動ではなく、それ自体が先住民の政治的、経済的、社会的、文化的な複合的な資源となっていると主張している（岸上 2007b: 132）。

3.4 生業研究の争点

狩猟採集社会研究と先住民研究において生業（活動）がどのように研究されてきたかについて概観した。考古学や歴史学、エスノヒストリー、進化生態学などにおいては、生業活動や採捕活動は研究の重要な概念であり、研究対象であり続けている（Kelly 1995; 野林 2008; Winterhalder and Smith eds. 1981）。一方、文化人類学や生態人類学の分野では、問題関心が変化してきた。ここで取り上げた研究は、研究領域のすべてを網羅するものではないが、今後の課題としていくつかの方向性や問題点を指摘することができる。

第1に、狩猟採集社会の生業を環境適応の視点からのみ把握してきた生態学的アプローチの限界が指摘され、対象グループの生業を外部社会との政治経済学的関係からも研究する必要性が認識された。すなわち、狩猟採集社会の生業活動は、所与の環境に適応しつつも、外界に開かれたシステムの一部として研究されなければならない。

第2に、狩猟や採集を、単なる技術の集合、生業様式もしくは生産様式のいずれかとして理解し、研究することが有効かどうかについては、研究者の間では一致した見解は得られていない。

第3に、現在の狩猟採集民が複数の生業を組み合わせ実践していることを指摘し

たバード＝デイビッドの生業様式論は、世界各地の事例とも一致する。かつてのもしくは現在の狩猟採集社会における経済活動全体の中での複合生業の実態、およびそれらの変化の解明は重要な研究課題であろう。

第4に、生業研究の焦点が、狩猟採集民の狩猟採集活動の解明から先住民社会における生業活動の実態や意義の解明に変化してきた。グローバル化した現代世界に住む多くの狩猟採集民が、政治的な理由で先住民化し、新たな社会や文化を構築しようとしている。そのような社会や文化においては、どのような生業活動が行われ、その活動にどのような政治経済的な意義や意味があるかについての解明が研究課題となっている。

4 北アメリカ極北地域における生業活動の特異性と生業モデル

北アメリカの北方地域、とくに極北地域においては第2次世界大戦後、文化変容に関する研究が多数行なわれ、その後には適応に焦点をあわせた生業活動の文化生態学的な研究が実施されてきた (Balicki 1986, 1989; 岸上 1994, 1998: 29–67)。

カナダ・イヌイットの生業活動と社会組織を長年にわたって研究してきたウェンゼルは、イヌイットが定住生活を開始した1960年代から急激に狩猟道具（高性能ライフルの採用）や運搬手段（スノーモービルや船外機の採用）の機械化が進んだイヌイットの生業活動がほかの地域の狩猟採集民の生業活動とは大きく異なったように見え、イヌイットは狩猟採集民イメージに適合しなくなったと述べている。そのうえでウェンゼルは、イヌイットやユピイト、イヌピアットの生業調査から生み出された生業概念や研究成果は、ほかの現代の狩猟採集社会の研究に適用でき、かつ有意義なものであるのかという問題提起を行っている (Wenzel 2002)。

現代のイヌイットの経済は、自家消費用の狩猟漁撈活動という生業経済と賃金労働という貨幣経済の2つのシステムの混交的な共存によって特徴づけられるため、イヌイットの経済は二重経済や混交経済と呼ばれている (Willmott 1961; Wenzel 1991)。この生業経済の核をなすものが狩猟漁撈活動やその捕獲物の分配と消費である。なお、北アメリカの極北地域では、ほかの地域と比べると、魚資源が重要で、食料となる植物食の比重はきわめて低いので、狩猟採集ではなく、狩猟漁撈もしくは狩猟漁撈採集と表現することをお断りしておく。

現代のイヌイットの生業活動には、すくなくとも4つの特徴がある。第1には、狩猟漁撈活動を行なうためには現金が必要であり、自立的な経済活動ではない。第2

に、イヌイットの食料の60%以上はカロリー的にみると南から持ち込まれた食料である。にもかかわらず、地元の食料資源や狩猟漁撈活動はイヌイットにとって文化的にそして社会的に重要でありつづけている。第3に、ライフルやスノーモービルの利用によって、現在のイヌイットの狩猟漁撈活動は集団活動というよりも少数の個人を単位とする活動となった。第4に、地元で捕獲される獲物はハンター間や他の村人と分配され続けている（岸上 2007c: 104–106）。

2001年のカナダの国勢調査によると、カナダには4万6千人あまりのイヌイットのうち約80%が極北地域に住んでいる（Statistics Canada 2006: 6）。イヌイットの約70%は、2000年当時、狩猟や漁撈に従事していた（Statistics Canada 2006: 10）。とくに45歳から54歳までの男性のうち90%が狩猟や漁撈を行っていた（Statistics Canada 2006: 11）。さらに全体で38%の世帯が食料の半分以上を捕獲した獲物に依存し、全体の33%の世帯が食料の半分を捕獲した獲物に依存していた（Statistics Canada 2006: 13）。また、イヌイット世帯の96%が、カンントリー・フードをほかの世帯の人々と分け合っていると国勢調査で回答しているという（Statistics Canada 2006: 14）。このようにカナダ・イヌイットは、定住化し、機械化した生業活動を行なっているが、獲物を取り、それを食べたり、ほかの人々と分配しあっていることが分かる。この状況は、政治経済的な状況が類似しているカナダのほかの極北地域とアラスカやグリーンランドの極北地域にはほぼ妥当すると考えられる³⁾。

上記のような特徴があるアラスカやカナダの極北地域における狩猟採集活動は、ウェンゼルの指摘したようにアフリカや南米などの狩猟採集活動とは大きく異なると思われる。次に、アラスカやカナダの極北地域における狩猟採集活動に関する研究を検討し、極北先住民型の生業モデルを提案してみたい。

4.1 北アメリカ極北先住民の生業研究と生業の位置づけ

1970年代からアラスカとカナダの極北地域に居住する先住民の生業活動が盛んに研究され始めた。この背景には、土地権をめぐる国家と先住民族の諸グループが政治交渉を始めたことがあった。1960年代以降、アラスカのユピートやイヌピアット、カナダのイヌイットは、定住生活を営み、貨幣経済のもと狩猟漁撈活動を行っていた。彼らの狩猟漁撈活動に携わる頻度は減少し、期間は短縮化され、さらに活動範囲も縮小していた。そのため、自らを狩猟漁撈民とみなしていた先住民の大半のグループは、土地権の政治交渉の中で狩猟漁撈活動の維持とそれを行なう領域を確保することを強く望んだ。彼らにとって、狩猟漁撈活動の維持が最大の関心事であったといえ

る。このような政治的な背景もあり、狩猟漁撈活動や土地の占有・利用の研究が盛んになったのである。

生業活動に関する体系的な研究は、カナダの極北地域、グリーンランド、アラスカにおいて実施された。その成果から極北地域の生業活動の共通点を紹介し、検討したい。

第1に、極北先住民の生業活動は、動物や魚類、植物の収穫（穫）、処理、分配からなる（Chance 1987: 85）。この処理の中には、儀礼なども含まれる。また、研究者によっては、消費や廃棄まで含む場合がある（Langdon 1984: 3; 本多 2005: 82）。広義に定義すると、生業のプロセスは、生産—流通—消費という経済のプロセスに相当する。狭義に定義すると、生業とは生産と分配がひとつのシステムを形成する社会的プロセスとなる（Fienup-Riordan 1983: 347; 岸上 1998: 57; Wenzel 1991, 2002）。

第2に、生業活動は、現地の人々にとって文化的な価値観を反映しており、文化的に重要な意味を持ち続けている。（Chance 1987: 85; Fienup-Riordan 1983; Wenzel 1991: 57）。フィエナップ＝リオードンは、生業活動は、目的を達成するための手段ではなく、目的そのものであり、それを再生産させる文化的な価値と自己イメージのより大きな文化的枠組みと密接にかかわっている、と指摘している（Fienup-Riordan 1983: 352）。

生業活動は、とくに極北民の世界観に関係している。ボーデンホーンやフィエナップ＝リオードン、ウェンゼラらは、獲物となる動物とハンターとの関係に関するイヌピアットやユピート、イヌイットの考え方が、生業活動の背後に存在し、分かちがたく関係していることを指摘している（Bodenhorn 1990; Fienup-Riordan 1983: XViii, 175–187; Wenzel 1991: 63）。

アラスカのイヌピアットを研究したボーデンホーンによると、ホッキョククジラはハンターの妻たちの寛大さを知ることができ、妻が社会的に責任をおい、寛大であるハンターにのみ自らを投げ出し、捕獲されると、イヌピアットの人々は信じているという（Bodenhorn 1990）。

アラスカのユピート社会で調査を実施したフィエナップ＝リオードンは、ハンターと動物の関係について次のように報告している。

「アザラシをしとめたハンターがアザラシの靈魂を大切に切り扱えば、そのアザラシは再び生き返ることができる。ほかの魚類や動物と同じく、アザラシは、自発的に自らを人間にさざげると信じられている。たとえば、アザラシは、ハンターの長所を感じ、そして実際に知ることができると言われている。もしアザラシが、ハンターと動物の関係やハンター

と仲間の人間の関係が良好であると判断すれば、そのアザラシは、そのハンターの銚や銃弾によって自らの命を投げ出すであろう。アザラシが殺される時に目覚めていれば、そのアザラシの靈魂は膀胱の中に入り込むだろう。そしてアザラシは人間の食べ物となって人間に生命を与えることになるが、その靈魂は生き続け、海に帰るのを待つであろう。事実、伝統的には沿岸部に住むユピートは、膀胱祭を開催した。その祭りでは、その年に捕獲したアザラシやほかの海獣の膀胱が風船のように膨らまされて、男宿 (qasqiq) に掲げられ、5日の間、獲物の靈魂を楽しませるための祝宴が繰り広げられた。そして5日目には、家族ごとに捕獲したアザラシなどの膀胱を海に持って行き、そこでアザラシが再びもとの姿で生き返ることができるように、靈魂が宿っている膀胱を海水上の穴から海中へと沈めた。】(Fienup-Riordan 1983: XViii)

この報告が物語るように、人間が生命を維持できるのは、獲物がハンターのために死んでくれるからである。さらにそのために獲物を殺すのはハンター（人間）であるが、それを再生させるのもハンター（人間）の役目であることが分かる。このように人間と動物の間には持ちつ持たれつの象徴的な関係が存在しているのである⁴⁾。

ウェンゼルは、カナダ・イヌイットの生業と世界観との関係を次のように述べている。

「イヌイットは、獲物をほかのイヌイットと分かち合うのとまったく同じように、アザラシやカリブーは、彼ら自身をイヌイットと分かち合うのである。イヌイットのハンターは、ほかのイヌイットと獲物を分かち合うことによってこの動物の寛容さにお返しをしているのである。したがって、もしハンターが寛容でないならば、ハンターとしての大切な生き方に反することになり、生業活動に従事できなくなるような制裁をほかのイヌイットから受けることになるだろう。また、動物のほうもそのハンターには近づかなくなるだろう。……中略……私たちは動物を捕獲し、殺し、消費することを生業の基礎であると考えているが、イヌイットにとっては生業とは動物と人間がお互いに義務を果たしあう時に起きる積極的な互酬性の結果なのである。」(Wenzel 1991: 63)

これらの世界観は、グリーンラドのカラーリット（イヌイット）の間でも認められる (Nuttall 1992)。このように生業活動は世界観と深く結びついているのでその継続は世界観の再生産を生み出すと考えられる。

第3に、生業活動を行うためには、現金の投入が必要である (Chance 1987: 85; Freeman 1993: 246-247; Langdon 1984: 5, 1991; Wenzel 1991)。装備やガソリン、銃弾を購入するためには現金が不可欠であるが、かつて盛んであったホッキョクギツネやアザラシ、オオカミ、ホッキョクグマの毛皮の販売を除けば、ほとんどの狩猟漁撈活動は、現金収入を生み出さない⁵⁾。極北民の生業活動の大半は、現金の獲得を目的とした活動ではない点を強調しておきたい。

第4に、「生業」活動は、親族関係（集団）やそれが行なわれる場所（海水上をふくめた大地）と深く関連している（Chance 1987: 87, 88）。エランナとシェロッド（Ellana and Sherrod 1984）は、キング島のイヌピアットのセイウチ猟、ギャンベルのユピートのホッキョククジラ猟、グッドニューズベイのサケ漁とサケの加工について、いかなる社会関係のもとでこれらの活動が組織されているかを調査した。そしてアラスカのイヌピアット社会では親族関係が生業集団や生業活動を組織する基盤になっていると指摘した。アッシャーとウェンゼルは、カナダのイヌイットやデネ／メイティの特徴として次の3点を挙げている。第1に、生業活動は、親族制度の一関数であり、社会の他の諸側面と同じように親族関係に基づく決まりによって規定されている。第2に、拡大家族は生業のための労働力と資源をプールする単位である。第三に、獲得した資源の分配や流通は拡大家族の組織によって規定されている（Usher and Wenzel 1988: 4-7）。そして生業活動は、それを行う特定の拡大家族集団と特定の活動領域との間には対応関係が認められる。

第5に、市場経済の浸透にもかかわらず、生業活動は中高年のハンターによって盛んに行なわれている。その一方で、生業活動は変化しつつある（Chance 1987: 87）。多くの研究者は、生業経済の領域と市場経済の領域が共存していることを指摘している（Chance 1987; Wenzel 1991; Willmott 1961）。

第6に、若者の生業活動離れや生業活動のレクリエーション化が認められる（スチュアート 1996; 岸上 1999; Stern 2000）。ただし、この指摘は、狩猟や漁撈活動が食料獲得において意味をなしていないのではない点を強調しておきたい⁶⁾。すなわち多くのイヌイットは、レクリエーションをかねて生業活動を行っているといえるだろう。

第7に、これまでの研究で明確に主張された点は、極北先住民の狩猟漁撈活動は、食料資源を獲得する活動以上のものであり、文化、社会、経済などの諸側面と密接にかかわったシステムであるということである。この点は、後に本論文の中で再度、取り上げる。

次に、この点をカナダのヌナヴィク地域のアクリヴィク村におけるアザラシ猟を事例として、検討し、イヌイット型の生業モデルを構築してみたい。

4.2 カナダ極北地域における生業活動としてのシロイルカ猟の場合

すべてではないにしても多くのイヌイット社会では、カリブーやホッキョクイワナ、アザラシは1年を通して中心的な食料である（表3参照）。一方、季節的に移動

をするシロイルカやカナダガンなどは、イヌイットがとくに好む季節限定の食料資源である。現在のイヌイットは、狩猟や漁撈による自給自足的な生活を送っているのではなく、多くの人が賃金労働の仕事につき、現金収入を得ながら狩猟や漁撈を行なっている。したがって、無職の人を除けば、アザラシ猟やシロイルカ猟は仕事のない週末や休暇、就労時間後に行なわれることが多い⁷⁾。

1970年代半ばから2004年にかけてアクリヴィク村の生業活動の年周期は基本的には大きく変化していない。夏季はホッキョクイワナ漁とアザラシ猟、ベリー類の採集、秋季はセイウチ猟、シロイルカ猟、アザラシ猟、カリブー猟、冬季は湖上での漁撈やカリブー猟、春季から夏季にかけてはアザラシ猟や鳥猟がおもに行われている。彼らの狩猟漁撈は、スノーモービルや船外機付きカヌーを利用した村からの日帰りの活動を基本としている。

1999年時点のアクリヴィク村のイヌイットの狩猟漁撈採集活動は、次の表3に示す通りである。

表3 アクリヴィク村の狩猟漁撈採集活動の1年(1999年現在)

主な捕獲対象物	月(1年)											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ホッキョクイワナ	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○
陸封性ホッキョクイワナ	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎
ホワイトフィッシュ	◎	◎	○	○	○	○				○	◎	◎
ワモンアザラシ	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎	○	○
アゴヒゲアザラシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○
シロイルカ							○	○	○	◎	◎	
セイウチ										◎		
ホッキョクグマ	◎	◎	○	○	○	○	○				◎	◎
カリブー	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○
ハクガン						○	○	○	○			
カナダガン					○	○	○	○	○			
カモ				○	○	○	○	○	○	○		
カモの卵						○						
ライチョウ	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○
ベリー類								○	○			

(注) 網掛けは中心的な捕獲物(食料)を示す。○は捕獲期, ◎は捕獲の最盛期を示す。

ここでは、アクリヴィク村のシロイルカ猟を取り上げて、生業について検討してみたい。

4.2.1 活動系としてのシロイルカ猟

アクリヴィク村周辺では6月から10月にかけてシロイルカがケープ・スミス島の近くを回遊する。特に10月から11月頃には南から北上する群がアクリヴィク周辺を通過し、秋季から冬季には北方に約180キロあまり離れたイヴィヴィク村付近のハドソン海峡に多数のシロイルカが集合する（地図1参照）。

アクリヴィク村のイヌイットによるシロイルカの捕獲には、個々のハンターが20馬力以上の船外機付き小型ボート（全長約4メートル）を利用して行う狩猟と大型ボート（全長約12メートル）を利用して行う狩猟の2種類がある。前者ではアクリヴィク村の近くにあるケープ・スミス島の周辺で、後者の場合にはイヴィヴィク村の周辺の海域で狩猟が行われる。

ここではケベック州ヌナヴィクのハドソン湾側にあるアクリヴィク村のハンターによる1999年10月のアクリヴィク村の近辺でのシロイルカ猟と獲物の分配、消費について紹介する。なお、2001年以降は、新しい資源管理体制が実施され、同村の地先でのシロイルカ猟は、禁止されている⁸⁾。

アクリヴィク村の1999年10月のシロイルカ猟という活動を時系列に記述する。アクリヴィク村のハンターは、朝9時頃に村を出て、日没後（17時30頃以降）に村へ帰ってくる人が多い。ハンター1人から3人が1組になり、三々五々に船外機付き



地図1 カナダ極北地域とアクリヴィク村の位置



写真1 シロイルカを探すハンター（1999年10月16日、ケープ・スミス島にて）



写真2 シロイルカを追跡するハンター（1999年10月16日、ケープ・スミス島の近く）



写真3 ライフルをかまえるハンター（1999年10月16日、ケープ・スミス島の近く）



写真4 銃を準備するハンター（1999年10月16日、ケープ・スミス島の近く）



写真5 銛を持ち、シロイルカに接近するハンター（1999年10月16日、ケープ・スミス島の近く）



写真6 銛を打つハンター（1999年10月16日、ケープ・スミス島の近く）



写真7 捕獲したシロイルカ（1999年10月16日、ケープ・スミス島にて）



写真8 シロイルカの肉とマッタックを積んだ船外機付きカヌー（1999年10月16日、ケープ・スミス島にて）



写真9 村人にシロイルカのマッタックを分配するハンター（1999年10月16日、アクリヴィク村にて）

写真10 村全体でのシロイルカのマッタックの分配（1999年10月28日、アクリヴィク村にて）



写真11 村全体でのシロイルカのマッタックの分配（1999年10月28日、アクリヴィク村にて）

写真12 村全体でのシロイルカのマッタックの分配（1999年10月28日、アクリヴィク村にて）





写真13 家に持ち帰られたシロイルカの
のマットック (1999年10月
28日, アクリヴィク村にて)



写真14 シロイルカの干し肉
(1999年10月28日,
アクリヴィク村に
て)



写真15 ハンター間での分配
(1999年10月28日,
アクリヴィク村に
て)



写真16 船長から村人への分
配 (1999年10月28
日, アクリヴィク村
にて)

小型ボートで出猟するが、多くの場合、狩猟場で他のボート数隻と合流する。まず、ケーブ・スミス島の海域を、シロイルカを探しながらゆっくりと航行する。シロイルカを発見すれば、追跡し、捕獲を試みるが、発見できない場合には、海を見渡すことができるケーブ・スミス島の南側の中央部の小高い丘に登り、そこから双眼鏡や肉眼でシロイルカを探す（写真1）。

シロイルカが陸の近くを回遊している場合には、丘の上からライフルでしとめることもあるが、多くの場合は、発見後、小型ボート数隻でシロイルカを追跡する（写真2）。シロイルカは危険を感じると、浅瀬に逃げ込んだり、陸や断崖の水際に接近する習性を持っている。この習性を利用してハンターは発見したシロイルカを浅瀬か陸地へと追い込み、十分に近づいた後、ライフルをうってから、大きな浮き（現在はプラスチック製石油缶）がひもによって連結されている回転式離頭鉞を打ち込む（写真3～6）。時々、鉞を打ち込んだ後にライフルでしとめることもある。この狩猟には鉞を獲物に打ち込むというハンターでしか味わうことのできない心を躍らせるような醍醐味がある。傷ついたシロイルカは逃げるが、浮きがついているので海底に没することはない。

シロイルカを仕留めると、それを近くの浜辺か磯へ小型ボートで曳航し、そこで解体をする（写真7）。ハンターやそこに居合わせたほかのハンターとマッタック（脂肪のついた皮部）や肉が分配される。なお、シロイルカの内臓や肉、骨の一部は解体場所もしくはその近辺に破棄されることが多く、鳥類や小動物のエサになっている。通常、獲物はその日のうちに村に持ち帰られる（写真8）。

船外機付きボートはアクリヴィク村に近づくと、ライフルを空に向かって連発し、村人にシロイルカのマッタックと肉を持ち帰ったことを知らせた。そのライフル音を聞いた村人はビニール袋を持参し、浜辺の小型ボート置き場へと集まってくる。また、ハンターの家族が、村のFMラジオを利用してシロイルカを捕獲したことを村人に知らせるとさらに多くの村人がビニール袋を片手に集まってくる。

シロイルカを3頭以上捕獲したハンターは、厚さ2センチメートルあまり、縦横30センチメートル×60センチメートルあまりの大きさのマッタックを1枚ずつほぼ全世帯の村人へ手渡す（写真9）。私の滞在先の主婦も1枚もらってきた。この1枚は大人4名と子供4名からなる世帯において2食分になった。

ハンターの留保分以外の肉や部位が余った場合には、イヌを飼っている人がエサとしてもらっていくこともあれば、海岸に捨て置き、かもめなど海鳥に食べてもらう場合がある。

さらにこの狩猟に参加したハンターは、近親族 (*restricted ilagii*, 拡大家族関係にある人々) にマツタックや肉を分配した後、残った肉とマツタックを自宅の冷凍機に保存した。狩猟後数日は、おもに親戚や近所の者がハンターの家を訪れ、食事に参加することによって再度、分配が行われた。さらに、浜辺で肉やマツタックを入手できなかった村人や親戚の者がそれらをハンターの家にもらいに来ていた。また、ハンター自らは人に託して、マツタックをモントリオールにいるイトコに届けたり、隣村に住むオジヤオバに届けたりすることも行われていた。

ここで紹介したような事例以外に、アクリヴィク村では、毎年秋に1度、ハンター・サポート・プログラムの資金を利用して村有の大型狩猟ボートでハンターをシロイルカ猟に派遣し、獲物を村の全世帯で平等に分配している (岸上 2008) (写真 10～12)。この村全体の分配によって各世帯は、20～30キログラムのシロイルカのマツタックや肉を入手することができる (写真 13, 14)。また、私有の大型狩猟ボートを利用したシロイルカ猟の場合にも、ハンターの間での分配 (写真 15) が終わると、獲物の一部が村人に分配される (写真 16)。ハンターや村人が入手したマツタックや肉は、分与や食事を通して繰り返し、分配され、消費されていくことを指摘しておきたい。

この活動のプロセスを、要約すると、捕獲、処理、分配、(廃棄)、消費、廃棄となる。イヌイトにとって、シロイルカ猟は、単なる食料資源の捕獲以上の活動である。この点を、活動のプロセスと関連づけながら検討してみたい。なお、現在のアクリヴィク村のシロイルカ猟には、特定の儀礼や祭りは随伴していないが、後述するようにイヌイトの世界観と深くかかわっている。

4.2.2 シロイルカ猟と食料資源

すでに指摘したように、現時点では北アメリカの極北地域に住む先住民の多くは、賃金労働に従事し、現金収入で都市から定期的に搬送されてくる食料品を購入することができる。また、失業者や病人、引退した人も、生活を送るうえで国家や州の手厚い保護を受けている。このため、地元での狩猟や漁撈によって獲得される食料は、彼らの生存にとって不可欠のものであるとはいえない。しかしながら、イヌイトは、狩猟や漁撈を継続し、地元でとれる動物の肉や魚、鳥類を食べ続けている。

セイウチの肉を敬遠する若者が増加したり、ピザやハンバーガーを好むイヌイトが増加したり、イヌイトの食事に対する嗜好は変化し続けているが、地元で捕れるホッキョクイワナ、カリブーやアザラシの肉、シロイルカのマツタックは、「真の食

料」(niqituinaaq)と呼ばれ、いまだに多くのイヌイットが好む食料である(スチュアート 1993; 岸上 2005)。この「真の食料」は現金で売り買いされることがほとんどないため、イヌイットはそれを狩猟や漁撈、分配、共食によってのみ入手することができる。そしてイヌイットにとって、家族や仲間とともに「真の食料」を分かち合い、食べることは、喜び(文化的な満足感の充足)を生み出すとともに、イヌイットであることを自覚するアイデンティティーの源泉であるといえる(岸上 2005; Searles 2002)。しかも、それは、また、栄養価に富み、かつ文化的に評価の高い食料であるといえよう(岸上 2005; Freeman 1992, 1993, 2005)。イヌイットにとって狩猟や漁撈は、彼らにとって重要な「真の食物」を入手する手段であり続けている。

4.2.3 シロイルカ猟と技術・物質文化

シロイルカ猟を実施するためには、道具や技術が必要である。ここで紹介した事例の場合、狩猟道具としては船外機、ボート、ライフル、銃、ロープ、浮き用のポリタンク、ナイフ、双眼鏡、銃弾、ガソリン、オイルが必要である。そのほか休憩時にお茶を沸かし、飲むための道具や燃料、ビニールシート、携帯食料なども必要である。これらは現金を用いて購入しなければならない商品である。この商品である道具や燃料を通して、イヌイットの狩猟漁撈は、市場経済と不可分に結びついているといえよう。また、どのようにして狩猟するかなど、道具を使いこなす知識と技術を必要とする。このように狩猟には、技術的・物質的な側面がある。

4.2.4 シロイルカ猟と環境的知識

シロイルカ猟を行うためには、いつ、どこで狩猟を行なうとシロイルカを捕獲する確率が高くなるのか、また、その狩猟場に行くにはどのようなルートをとるのか、捕獲対象のシロイルカにはどのような習性があるかなどの知識をもっておく必要がある。

たとえば、シロイルカは自分の身に危険が迫ると、海岸や岸壁に近づく習性があるという知識や、狩猟場や見張り場の周辺、そこに行くまでの場所や経路などの環境条件や地名を、地元のハンターは経験や熟練したハンターに同行することを通して習得している。このような知識は、環境的知識や土着の知識と呼ばれているが⁹⁾、シロイルカ猟には付随しており、実践することによって他者や次世代の者に受け継がれていくのである。

4.2.5 シロイルカ猟と社会関係

シロイルカ猟にかかわるプロセスの中で、捕獲、分配、消費の3つの活動は社会関係と密接に関係している。たとえば、シロイルカ猟に行く時には、だれといっしょに行くのか。すなわち、狩猟集団はどのような社会関係に基づいて組織されているのか。獲物は、狩猟場においてだれとどのように分配し、それは村に帰ってからは、だれにどのようなやり方で分け与えられるのか。ハンターはだれといっしょにシロイルカのマツタックや肉をたべるのか。このようにそれぞれの活動は特定の社会関係と関係している。アクリヴィク村の場合を見てみよう。

アクリヴィク村のハンターが、シロイルカ猟に行く場合には、2人1組で船外機付ボートに乗って出猟することが多い。この場合には、ひとりがエンジンと舵を操り、もうひとりがライフルや銛を打つ役割につく。この2人は、父と息子、兄弟、イトコ、オジとオイなど拡大家族関係のネットワークの中から選出される傾向が顕著に認められる。また、最近では、仲のよい友人同士や仕事場の同僚同士で狩猟に出かける場合もあるが、頻度は、家族・親族と比べれば低い。

分配に関しては、数次にわたって行なわれる。まず、世帯を異にするハンターが同じボートに乗っている場合には、その間で第1次分配が行なわれる。狩猟時にほかのボートがいっしょに活動していた場合には、獲物の解体に参加したり、その場に居合わせたハンターには、獲物の分配が行なわれる。それぞれのハンターが村に帰りつくと、海岸に獲物をもらいに来た村人全員に少量であっても手渡す。また、ハンターが家にもって帰ると、獲物の一部分を祖父母や両親、オジオバ、兄弟姉妹、イトコに分け与えることがある。またハンターが、大量の獲物をとった時には親戚でなくても古老や寡婦には、優先的に獲物を分配することがある。さらに食事を通して、獲物は世帯外の家族や親戚、友人と分かち合われる。このように分配や食事を通して、獲物はおもに拡大家族のメンバーによって分配された後、更なる分配や食事を通して最終的には村人全員の口に入ることになる。

シロイルカ猟や獲物の分配・消費は、大半の場合、拡大家族関係にそって組織され、実践される傾向がある。この実践によって、それにかかわる社会関係は確認され、維持されることになる(岸上 2007d; Kishigami 2004)。このように狩猟活動・分配活動・消費活動は、既存の社会関係の再生産と表裏一体の関係にあるといえよう。

4.2.6 シロイルカ猟と世界観

すでに多くの極北研究者が指摘したように、イヌイットと動物との間には相互依存

関係を象徴する世界観が存在している。ヌナヴィク地域では、この世界観は全体的に衰退傾向にあるが、シロイルカなどの大型海獣の場合には、いまだ残っている。そのおもな骨子を紹介しよう。

シロイルカは、ハンターにとられるためにやってくるのであり、ハンターは目の前に出現した獲物は敬意をもって捕獲しなければならない。ハンターは、獲物を無駄にすることなく、かつほかのイヌイットに分かち合わなければならない。シロイルカは人間（イヌイット）のことを知る能力を持っているので、ハンターが適切な行動をとれば、シロイルカの霊魂は喜んで、シロイルカの主の世界に返り、再び形姿を得て、同じハンターの前に捕られるために出現する、とイヌイットは信じている。アクリヴィク村を含めヌナヴィク地域の古老は、「シロイルカを捕獲しなくなったら、イヌイットの前から永久に姿を消す」、「シロイルカをとればとるほど、数が増える」、「イヌイットがシロイルカの肉やマツタックをほかのイヌイットと分かち合わなくなったら、シロイルカが捕れなくなる」と公の場で若者に対して発言している。このような言説は、西洋的な科学観からでは理解が難しいが、イヌイットの狩猟活動や生き方との間には整合性が認められる。

このようなハンター（イヌイット）と動物との間の象徴的な相互依存関係は、アラスカからグリーンランドの先住民社会において普遍的に認められる（たとえば、Bodenhorn 1990; Fienup-Riordan 1983; Nuttall 1992; Tyrrell 2007; Wenzel 1991 など）。ただし、ヌナヴィク地域のような世界観の衰退が激しく、キリスト教的な考え方が影響を及ぼしつつある地域もある。最近では、シロイルカの霊魂やシロイルカの主を司り、イヌイットに日々の糧を与えてくれているのは、キリスト教の神であると多くのイヌイットが表明するようになってきている。しかしながら動物と人間との象徴的な相互依存関係についての考え方には、キリスト教の影響がみられるものの、継続性も認められる。

このような狩猟活動と世界観との表裏一体的な結びつきの強さは、アフリカの狩猟採集民と比較した場合、極北地域の諸文化の特徴のひとつと考えられる（たとえば、Ingold 2005; Irimoto and Yamada eds. 1994; 大林 1991, 1997; スタルツェフ 1998; Willerslev 2007 など¹⁰⁾。

4.2.7 シロイルカ猟とハンターの意識

イヌイットのハンターにとってシロイルカ猟は、特定の季節に限定された狩猟活動であるが、この活動はハンターにいくつかの意味において重要な活動である。

第1に、シロイルカ猟のような海獣猟に従事することは、イヌイットのハンターとしてのアイデンティティを喚起させ、再確認させる活動のひとつである。多くのハンターは、成果をあげることを目標としながらも、この活動に従事すること自体やそのプロセスからもハンターとしての喜びや満足感を得ている。

第2に、シロイルカのような全長2, 3メートル以上、500キログラム以上ある大型海獣を仕留めることは、ハンターの腕前を証明するうえに、社会的な名声を獲得する手段となっている。すなわち、シロイルカを捕獲するには、ハンターとしての経験や技量、知識、判断を必要とするため、シロイルカを捕獲したハンターは、ほかのハンターや村人から腕のよいハンターとして認められることを意味する。さらに、大型獣の肉は、食物分配の慣習に従って、拡大家族集団内のみならず、村の大半のイヌイット世帯に分け与えられることになる。特定のハンターが、村人に多くの食料をもたらせば、もたらすほど、そのハンターは、社会的な名声を得ることになる。

このようにシロイルカ猟は、ハンターのアイデンティティや意識、満足感と密接に関連している活動である。

4.2.8 生業活動とイヌイット社会、国家、国際社会

シロイルカ猟をはじめとするイヌイットの狩猟、漁撈、ワナ猟、採集のほとんどは、売るための商品を生産する現金獲得活動ではなく、イヌイットの間で分配され、消費される食料や衣類の素材を獲得するための活動である。ここで注意すべき点は、この種の生業活動を維持するためには、恒常的な現金の投入が必要であり、そのためにはハンター自身やその家族が現金収入源を持っていないという現実である。とくに1960年代以降のイヌイット社会では、多くのイヌイットは、複数の経済手段を組み合わせながら生計を成り立たせている。イヌイットの狩猟・漁撈・採集・ワナ猟活動を総称して生業活動と定義すると、それは現代のイヌイット社会においてはイヌイットの経済活動とイコールではなく、その一部分である¹¹⁾。

また、国家や国際社会によって先住民の生業活動に制限が加えられる場合がある。たとえば、ホッキョククジラやツチクジラのように資源の保全を目的として、国際捕鯨委員会から1年間あたりの捕獲頭数に制限が課せられている(岸上2007b)。現在、アクリヴィク村を含むヌナヴィク地域では、シロイルカの捕獲制限は1年間で15頭まで、ハドソン湾やウングバ湾の地先での狩猟の禁止などの規制がカナダ政府から課せられている。このように、先住民の生業活動は、国家や国際社会との関係の中で営まれている点に留意する必要がある(岸上2003)。

4.2.9 生業活動と毛皮交易

現在のシロイルカ猟などのイヌイットの狩猟漁撈活動は、外部社会との交易とは直接関係していないが、イヌイットのホッキョクギツネのワナ猟（1920年ごろから1980年ごろまで）とアザラシ猟（1960年ごろから1983年ごろまで）は、外部社会との交易を目的として実施されていた。ここでイヌイットの生業活動と毛皮交易との関係について触れておきたい。

1910年代の終わりからハドソン湾会社は、カナダの極北地域においてイヌイットからおもにホッキョクギツネの毛皮を獲得しようと試みた。このイヌイットとの交易のために、ハドソン湾会社は特別な交易の制度を作り上げた。イヌイットはひとりひとりワナ猟師として各交易所に登録され、各個人の口座が開設された。交易所の支配人は、各ワナ猟師の前年の実績を吟味し、その査定に基づいて、ワナ猟期が始まる前に必要な鉄製ワナ具や食料やそのほかの物資をイヌイットが購入できるように信用貸しを行った。イヌイットはワナ猟に必要な物資をそろえると、11月頃から翌年4月頃まで各自の狩猟・ワナ猟地に出かけた。イヌイットは海氷上に冬キャンプを形成し、アザラシの呼吸穴によって食料を入手しながら、冬キャンプから内陸地域までホッキョクギツネのワナ猟に犬ゾリで何度か行っていた。この期間に、イヌイットは何度か交易所に捕獲したホッキョクギツネの毛皮を持ち込み、借金を返済するとともに必要な物資を追加購入した。この制度は、イヌイットの定住化が完了する1960年代まで機能していた。この交易を通して、イヌイットは外部社会からライフル、鉄製ワナ具、カヌー、ナイフなどを入手し、狩猟活動の効率を向上させた一方で、イヌイットが外部社会に物質的に依存するようになった。

アザラシ皮の交易は、カナダの極北地域においては1960年ごろから本格的に開始された。ウェンゼルは、アザラシの毛皮などの交易は、1980年代半ばまでは生業活動や社会関係を維持させる上で貢献をしてきたと主張している（Wenzel 1991）。彼は、社会関係の再生産のメカニズムを次のように説明している。親族関係をもとに組織された狩猟集団によって獲物が捕獲された後、その肉はいくつかの決まった方法に則って、拡大家族内や拡大家族間で分配され、消費される。これらの分配の実践を通して、自らの手によらずとも必要な獲物を入手できるとともに、食物やサービスの互酬的な交換や循環を通して社会関係が維持されるのである。一方、狩猟活動を通して獲得したアザラシの毛皮はハドソン湾会社や生活協同組合などの毛皮業者に売ることができ、現金収入を得ることができる。この現金を利用して、彼らは生業活動を続けるために必要なガソリン、銃弾などを購入する。このように現代の社会的脈絡において、

現金の利用と生業活動，社会関係との間に相互依存関係が作られ，イヌイットが社会関係を再生産させることを可能にしたのであった。

ところが1983年にヨーロッパ共同体（EC）が，動物愛護運動の影響を受けてアザラシなどの毛皮の輸出入を一切禁じたことが契機となり，ホッキョクギツネやアザラシなどの毛皮の需要が激減し，イヌイットは毛皮を売って現金収入を得ることができなくなってしまった。このため，以前のように多くのハンターが活発に生業活動に従事することができなくなってしまったのである。

このように1920年代以降のイヌイットの狩猟活動が毛皮交易のために行われ，1980年代はじめまで生業活動と市場経済はうまく共存してきた。現在では，イヌイットが生業活動によって獲得した肉や魚を売って現金を稼ぐことはほとんどないが，かつては彼らの生業活動のひとつとして商業狩猟を行っていたのである¹²⁾。しかし，その目的は，生業活動全体やそれに基づく生活を維持させることであった点を強調しておきたい。したがって，私はスチュアートと同じく現金を獲得する経済活動でもそれが「伝統的な」生活や生業活動を維持するために使用されている限りは，生業とみなしてもよいと考える（スチュアート1996）。

4.2.10 シロイルカ猟からみたイヌイットの生業活動の特徴

本論文で検討してきたようにイヌイットの生業活動は，単なる食料獲得活動ではなく，それ以上のさまざまな側面をもつ複合的なシステムであるといえる。グローバル化などイヌイットをめぐる社会経済政治的な変化と連動して，イヌイットの生業離れや生業のレクリエーション化の傾向が指摘されているが，そのシステムは，本論文で検討してきたように現在でもイヌイットにとっては，日常生活の中で社会・経済・文化的な意義を持ち続けているといえる。

さらに，この生業活動は，コミュニティーレベルや国家レベルでもいくつかの機能があることが指摘されている。たとえば，生業活動に従事し，食料を獲得し，それを家族や村人に分配することによって，コミュニティーの社会・文化的な統合において重要な役割を果たしていることなどが指摘されている（たとえば，Fienup-Riordan 1983; Dahl 1989, 2000; Nuttall 1992; Wenzel 1991）。また，イヌイットの生業活動がカナダ国家の中でのイヌイットの独自性や先住民性を示す政治的なエスニック・シンボルとしての効果があることも指摘されている（スチュアート1996; 岸上2007f）。

以上から，イヌイットらの生業活動は，複合的な機能や効果，諸側面をもつ食料獲得活動であることがわかる。私は，これらの研究の流れを踏まえた上で，現代の極北

先住民にとっては、生業活動は、食料資源を獲得するための活動ではなく、生業活動自体が彼らの複合的な資源となっていることを強調しておきたい（岸上 2007b, 2007d）。

4.3 シロイルカ猟を基にした極北型生業モデルの提案とその活用

次に、本論文で取り上げた既存の研究とシロイルカ猟の事例を基にしてイヌイットの生業活動のモデルを提示してみたい。これまで紹介し、検討してきた研究事例とシロイルカ猟の諸側面を総合すると、次のようにいうことができるだろう。イヌイットの生業活動は、捕獲から加工・処理、分配・流通、（廃棄）、消費、廃棄へといたる一連の活動系とそれに対応する儀礼活動の活動系からなり、その2つの活動系は、社会関係、技術・道具、世界観、環境的知識と密接に関連している。したがって、生業活動とはこの2つの活動系とそれらに関連する諸文化・社会・物質的側面（要素）からなる経済システムである¹³⁾。このシステムの構成要素を説明すれば、次のようになる。

活動系1の構成プロセス

- ①捕獲：獲物を入手する活動
- ②加工・処理：解体したり、貯蔵したり、料理をするなど獲物に手を加える活動
- ③分配・流通：獲物やその1部を分配したり、流通させる活動（交易活動も含む）¹⁴⁾
- ④消費：食料資源や原料資源として利用する活動
- ⑤廃棄：残余物を捨てる活動

活動系2

儀礼、祭り、タブーの遵守、まじないの実践：捕獲、加工・処理、分配・流通、消費、廃棄の諸活動に関連して実施される儀礼など

活動系2は、活動系1の諸活動や活動系全体に関連する儀礼、祭り、タブーの遵守、まじないの実践などの諸活動である。アラスカのユピートの膀胱祭りやイヌビアットのブランケット・トス祭り（Nalukataq）などさまざまな儀礼が実践されている。また、シベリアの狩猟採集民の間では狩猟儀礼が実践されてきたことが報告されている（たとえば、ロット＝ファルク 1980; スタルツェフ 1998）。さらに、シベリアから北アメリカの寒冷森林地帯には熊祭りの儀礼が日本列島の北部からオレゴンに至る北太平洋

沿岸には鮭儀礼が存在している（大林 1991, 1997）。このように北方諸民族のさまざまな狩猟漁撈採集活動には、儀礼や祭り、タブーの遵守が付随している。活動系2は、日常的なタブーの遵守、祈りや呪いの実践、儀礼、祭りなどの諸実践を包括する活動系である。

関連要素：活動系1と活動系2に連動する諸側面（諸要素）

- ①行動的側面（活動系1と2の諸活動が実施される時に参照される行動規則）
- ②社会的側面（活動系1と2の諸活動が組織される時の人と人の社会関係）
- ③技術・道具的側面（活動系1と2の諸活動で利用される道具と技術）
- ④イデオロギー的側面（活動系1と活動系2の背後にある動物と人間の象徴的な関係を示す世界観や自然観、価値観、キリスト教の教え）
- ⑤知識的側面（動物や植物、天候、土地などの環境に関する先住民の知識）

活動系1と活動系2の諸活動には、①行動的側面、②社会的側面、③技術・道具的側面、④イデオロギー的側面、⑤知識的側面の5つの側面がある。これらの側面には、特定の要素が連動している。

これを図示すれば、表4のようになる。このシステムを極北型生業モデルと呼んでおく。このモデルは、本論文で紹介した渡辺の生活のキュービック・モデル（渡辺 1977a）と本多（スチュアート）による生業モデル（本多 2005: 82）をたたき台としながら、イヌイットの生業の特徴を加味し、活動系と非活動系の要素に分け、あらたな側面（要素）を追加し、再構築したものである。活動系1の実践は、活動系2や関連要素の再生産を生み出す一方、活動系1の実践は、関連要素によって条件づけられている。したがって、2つの活動系と関連要素は相互に連動しているので、一方の変化は、もう一方の変化を生み出す。このモデルを利用すると、さまざまな狩猟採集活動を、活動系1、活動系2、各関連要素の内容を調査することともに、それらの間の相互関係を把握することによってその活動全体をシステムとして把握し、記述できる。

表4 極北型生業モデル

生業システム	活動系1	①捕獲～②加工・処理～③分配・流通～④消費～⑤廃棄（*廃棄は、各活動の後にも起こる場合がある）
	活動系2	活動系1に関連する儀礼や祭り、タブーの遵守、まじないの実践
	側面（関連要素）	活動系1と2の各活動の諸側面（連動する行動規則、社会関係、技術・道具、世界観、環境知識など）

ここで提案した狩猟採集の生業モデルは、イヌイットなどの極北先住民の事例に基づくものであるが、ほかの地域の狩猟採集社会研究にも適用できる汎用性のあるモデルである、と私は主張したい。そのうえで、生業研究への貢献としてこのモデルの学問的な意義について、述べておきたい。

第1に、個別の狩猟漁撈採集活動の2つの活動系と関連要素のそれぞれの内容やそれらの関係（結びつき方）はグループや地域、時代によって異なっていることが想定されるが、このモデルを利用すると、特定の地域と時点における狩猟漁撈採集活動を調査し、記述するための枠組みを提供する。たとえば、グイッチンのカリブー猟においては、活動系1と活動系2、関連諸要素の内容はいかなるものであるか、さらにそれらがどのように関連しあいながら生業活動システムを形成しているかを調査し、記述することができる。

第2に、第1によって抽出された特定の生業システムが当該社会の全体や経済領域の中で果たしている位置づけや効果を、特定の社会的な脈絡の中でほかの社会的諸側面や生業活動、経済活動と関係づけながら考察することができる。たとえば、現在のアザラシ猟のイヌイット社会やイヌイットの経済活動の中での位置づけや社会・文化・経済・政治的な意義を、具体的なモデル事例をもとに検討することができる。

第3に、同一グループの特定の生業活動がどのように変化してきたかを、この生業モデルを利用して複数時点の間で生業システムの活動・要素の内容や活動・要素間の関係を通時的に比較することによって研究することができる。

第4に、この生業モデルを利用すれば、イヌイットとグイッチンなど異なる社会間でのカリブー猟の比較研究を行うことができる。このようにこのモデルは、調査手段にのみならず、同一社会内での分析や通時的比較の手段や異なる社会間での通文化的な比較の手段として利用できる。

第5に、生業複合が行なわれている場合には、ここの生業活動についてのモデルを組み合わせるにより、当該社会における生業の全体像を描くことができ、かつその社会や社会外との政治経済的な関係の中に生業活動を位置づけることができる。

5 結語

文化人類学では、狩猟採集や園耕、牧畜、農耕などの食糧生産を生業活動としてカテゴリー化し、社会を分類することが行われてきた。近年、この社会の分類の妥当性を問う論文が出版されている（Pluciennik 2001）が、本論文ではこの問題を直接扱う

のではなく、狩猟採集をめぐって「生業」概念がどのように展開されてきたかを整理、検討した。その結果、「生業」には、「最低限の生存」や「食料獲得の活動」、「食料獲得の手段」、「社会関係や世界観と深くかかわる社会経済活動のシステム」などさまざまな定義があることが判明した。

狩猟採集社会研究において生業活動がどのように検討されてきたかを整理した結果、大きく分けると、生態学的アプローチと様式論的アプローチに大別できる。生態学的アプローチは、生業活動が環境に適応するためにどのように展開され、それが文化や社会のほかの側面にどのような影響を及ぼしてきたかを解明しようとする文化生態学のアプローチに代表される。様式論的アプローチは、狩猟採集生業様式は存在するか、また、狩猟採集は生産様式であるか否か、といった様式論として展開してきた。リーコックとリーは、多くのバンド社会に共通して見られる特徴を指摘し、採捕の生産様式（foraging mode of production）の可能性を指摘しているが、狩猟採集は生産様式ではなく、技術に過ぎないと結論づけている（Leacock and Lee 1982）。エレンは、狩猟採集は歴史・社会・文化に埋め込まれているので技術や道具の寄せ集め以上のものであると考え、生業様式であると主張している（Ellen 1988）。インゴールドは、狩猟採集と採捕を対比させ、前者は生産様式（技術と社会関係からなるシステム）であるが、後者は生業様式（技術のシステム）であると主張している（Ingold 1988）。

これらの様式論とは別個に、バード＝デイビッド（Bird-David 1992b）は、独自の生業様式論を展開した。彼女は、特定の個人、世帯、家族、コミュニティーのレベルで狩猟採集民ナヤカが、複数の生業活動を複数組み合わせる生活している点に着目し、現代の狩猟採集民の生業の特徴であるとした。サンの人々があるときには狩猟に従事し、別の時には農耕や工芸品製作、ヤギ飼養など従事している事例（池谷 2007）のような生業複合が世界各地の狩猟採集社会から報告されている。バード＝デイビッドが主張するように生業複合は、現代の狩猟採集社会の特徴のひとつであるといえよう。

さらにかつてのもしくは現在の狩猟採集民を先住民として研究する研究者は、国家やグローバル経済と生業活動の関係、国家の中の先住民にとっての生業活動の意義などの解明を試みた。この一連の研究では、生業離れ、生業のレクリエーション化、アイデンティティーの構築と深く結びついた生業の側面、生業活動の政治・文化・社会・経済的な資源化が指摘されている。

このような研究史の流れを把握したうえで、極北地域の狩猟採集民（先住民）の生業活動の諸特徴とイヌイットのシロイルカ猟を事例として検討し、狩猟採集活動にか

かわる極北型の生業モデルを提案した。その生業モデルとは、捕獲から加工・処理、分配・流通、(廃棄)、消費、廃棄へといたる一連の活動系1とそれに関連する儀礼活動の活動系2からなり、その2つの活動系の諸活動には、それぞれ行動的側面(行動規則)、社会的側面(社会関係)、技術・道具的側面(技術・道具の使用)、イデオロギー的側面(世界観やキリスト教)、知識的側面(先住民がもつ環境に関する知識)が存在している。したがって生業活動とは、この2つの活動系とそれらに関連する文化・社会・物質的側面(要素)からなる経済システムであると定義し、モデル化することができる。

このモデルは、イヌイットのみならずほかのグループの狩猟採集活動を調査する視点を提供するのみならず、社会全体の中でほかの経済活動との関係の記述にも利用できる。さらに、このモデルを利用した調査結果を通文化的に比較することや同一社会内において通時的比較や共時的比較をすることが可能となる。かかる意味で、ここで提起した生業モデルは、これまでの狩猟採集社会の生業研究にはなかった汎用性のあるモデルであると考えられる。

謝 辞

この論文について3名の査読者から建設的な批判やコメント、質問を頂戴した。最終原稿を書き上げるにあたり、参考にさせていただきながら、できる限り批判や質問に回答するように試みた。3名の査読者の方々に感謝する次第である。また、国立民族学博物館の外来研究員である林耕次氏からアフリカ関係の関連文献をご教示いただいた。記して感謝の微意を表したい。

注

- 1) 「生業」や「生業活動」は、多義的であり、複数の意味合いを併せ持つので、現代の狩猟採集民による狩猟や漁撈の活動そのものを総称する場合には、現金による商品の購入も含め資源を獲得するすべての方法や活動を意味する procurement を使用するべきだという研究者もいる(Bird-David 1992a; Shannon 2006)。
- 2) アラン・バーナードは、狩猟採集民の実際の生業活動よりも生活様式としての狩猟採集活動を重視する立場から、現在の多くの(元を含む)狩猟採集社会には狩猟採集思考様式(生き方としての狩猟採集)が存続しているという説を提起している(バーナード2003)。
- 3) ロシア(旧ソ連)のシベリアや極東地域の狩猟採集民の生業活動の動向は、国家と狩猟採集民との関係を考えるうえで、興味ぶかい事例を提供する。ソ連時代の連邦政府は、シベリア先住民の狩猟者(「常勤猟師」)にライフル、銃弾、ワナ具などをコルホーズやソフホーズを通して安い価格で提供した一方、毛皮や肉類などの狩猟産品を適正な価格で買い上げていた。このような国家の保護政策により、ソ連時代の狩猟活動は、伝統的とはいえなが、安定し、継続されてきた。しかし、ソ連が崩壊した後、狩猟活動に装備や燃料が不足しはじめ、かつそれらの価格が高騰した。さらに、国家の買い上げが実質的になくなり、市場動向の影響を受け、毛皮をはじめとする産品の価格が低下した。このため多くの狩猟者は経済困難に陥った。シベリアや極東地域では、この状況の中で2つのあらたな現象が見られた。第1

は、現金収入を得るための毛皮獣狩猟が衰退し、逆に自家消費用の食料をえるための狩猟の比重が高くなってきた。第2に、各地域で国家やコルホーズやソフホーズが企業体を組織し、狩猟業の救済と活性化に乗り出している（佐々木 1998a, 1998b; 田口 1998 など）。この動向がいつまで続くかは不明であるが、世界のほかの地域の狩猟者とポスト社会主義社会の狩猟民は異なる動きを見せている。

ナッシュは、中南米において市場経済が浸透したにもかかわらず、生業経済が存続し、重要であり続けている点を指摘している（Nash 1994）。

- 4) 煎本孝は、北方文化の共通特質として、初原的同一性、超自然的互酬性、共生と循環の思想などを指摘している（煎本 2007: 19）。そして超自然的互酬性の事例として、トナカイとチペワイアンとの関係を次のように述べている。「カナダの森林地帯に住むトナカイの狩猟民であるチペワイアンは、狩猟とは霊的存在であるトナカイが自ら肉を与えるために人々のところにやって来るものだと考えている。また、そのために人間はトナカイに対して敬意を払わなければならない。そこでは、人間とトナカイとの関係は二者間における肉と敬意の直接交換である。」（煎本 2007: 23）。内容は多少異なるものの類似した指摘が、シベリアの狩猟民ユカガールの事例からも行われている（Willerslev 2007）。
- 5) 多くの地域では、狩猟や漁撈で獲得した獲物を売ることが法的に禁じられていたり、特別な商業用の許可書（ライセンス）が必要とされたりしている。カナダのヌナヴィク地域では例外的にハンター・サポート・プログラムを利用して村が村人から魚や肉を買い上げ、村全体へ再分配している（Gombay 2005; 岸上 2007e; Kishigami 2000, 2004）。
- 6) 賃金労働などがイヌイットやユピート、イヌピアットにとって重要な生計手段となってきたが、彼らの多くにとっては狩猟や漁撈は松井健（2000）のいうマイナー・サブシステムではなく、重要な食料獲得活動であり続けている。
- 7) カナダ・イヌイット社会の現代の経済構造については、岸上（2007d）の第3章を参照されたい。
- 8) ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の管理制度については、岸上（2001a, 2003）や Kishigami（2005）を参照されたい。
- 9) イヌイットの環境的知識や土着の知識については、大村（2002, 2007）や Stevenson（1996）、Wenzel（1999）を参照されたい。
- 10) オーストラリア先住民の狩猟や漁撈は、祖先の精霊との会話を通じて行なわれていることが報告されている（松山 1994: 100; 1996: 35-37）。彼らの世界観に由来する食物規制が、日常の狩猟や分配の制限になることがある。また、その規制を解除し、魚やカササギガンの豊穡を祈る儀礼などが存在している（松山 1994: 111, 113-117, 126）。このようにオーストラリア先住民の場合には、狩猟採集活動は世界観と深く関係している。
ターンプルによるピグミーの自然観の記述（Turnbull 1965）、さらにインドのナヤカの事例を加味したバード＝デイビッド（Bird-David 1990）による狩猟採集民の環境観（「与えてくれる環境」や「恵む環境」）の指摘が存在する。市川はムプティ・ピグミーのゾウ槍猟について、「出発の二、三日前から、彼らは毎晩、守護霊のモリモを呼んで儀礼をおこない、そのあとでゾウ狩りの歌（プトゥーマ）をうたって氣勢をあげていたからだ。」（市川 1982: 81）と報告している。また、「森の主」が宿る木の存在や森の主と狩猟の関係が指摘されている（市川 1998: 123, 126）。このような情報は散見されるものの、極北地域とアフリカ地域などの狩猟採集社会の世界観を比較した場合、後者においてはハンターと対象動物である獲物の関係が世界観のレベルではほとんど言及されていない。アフリカや中南米などの狩猟採集社会におけるハンターと狩猟動物の象徴的關係に関する研究は、今後の課題のひとつである。
- 11) 現代のイヌイット社会の生産様式は、生業活動と賃金労働活動からなる混交経済システムから構成されている。したがって、生業活動をイヌイット社会の生産様式そのものとみなすことはできないといえよう。
- 12) ヌナヴィク準州では、ホッキョクイワナを商業的に捕獲しているイヌイットがいる。また、ヌナヴィク地域で実施されているハンター・サポート・プログラムでは、村がハンターから魚、鳥類、陸獣や海獣を現金で買い上げ、食料を必要としている村人に分配することがある（Gombay 2005; Kishigami 2000; 岸上 2007d, 2007e）。後者の場合は、商業目的の狩猟であるとは必ずしもいえないが、獲物の売買であることは事実である。
- 13) ラフリンは、狩猟とは単なる生業の技術ではなく、ひとつの生活様式であり、人間の身体と技術、社会組織、人間と環境との関係を統合した行動のプロセスであると主張している。

そして狩猟は、(1) 子供の訓練、(2) 探索・情報収集、(3) 追跡、(4) 捕獲・捕殺、(5) 回収の5つの活動の流れから構成されると指摘している (Laughlin 1968: 304)。

ウェンゼルらは、イヌイットの生業活動が社会的に規定され、構成されているので、「社会経済システム」や「社会経済」と呼んでいる (Wenzel 1991: 61; Wenzel, Hovelsrud-Broda and Kishigami 2000: 3)。

- 14) 本論文では20世紀のイヌイットの毛皮取引を紹介したが、歴史的に見ると、アラスカやカナダの極北先住民は、特定の地域内での集団内や集団間の取引、地域を越えた異民族間の取引を行っていたことが知られている (たとえば、Burch 1998; 岸上 2001b, 2002)。

文 献

秋道智彌

- 2007 「序—資源・生業複合・コモンズ」秋道智彌編『資源人類学 08 資源とコモンズ』pp. 13-36, 東京: 弘文堂。

Balikci, A.

- 1986 The Alaskan Eskimos at the Crossroads. *Reviews in Anthropology* 13 (1): 120-127.

- 1989 Ethnography and Theory in the Canadian Arctic. *Études/Inuit/Studies* 13 (2): 103-111.

バーナード, アラン

- 2003 「狩猟採集社会の思考モード」ステュアートヘンリ編『「野生」の誕生—未開イメージの歴史』pp. 103-136, 京都: 世界思想社。

Beals, R. I., H. Hoijer, and A. R. Beals

- 1977 *An Introduction to Anthropology* (Fifth Edition). New York: Macmillan Publishing Co., Inc.

Bird-David, Nurit

- 1990 The Giving-Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters. *Current Anthropology* 31 (2): 189-196.

- 1992a Beyond “The Original Affluent Society”: A Culturalist Reformulation. *Current Anthropology* 33 (1): 25-47.

- 1992b Beyond “The Hunting and Gathering Mode of Subsistence”: Culture-Sensitive Observations on the Nayaka and Other Modern Hunter-Gatherers. *Man* 27 (1): 19-44.

Bock, Philip K.

- 1974 *Modern Cultural Anthropology: An Introduction* (Second Edition). New York: Alfred A. Knopf.

Bodenhorn, Barbara

- 1990 I'm Not the Great Hunter, My Wife Is: Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14 (1/2): 55-74.

Burch, Jr., E. S.

- 1988 Mode of Exchange in North-West Alaska. In T. Ingold et al. (eds.) *Hunters and Gatherers 2: Poverty, Power and Ideology*, pp. 95-109. Oxford: Berg Publishers.

Case, D. S. and D. A. Voluck

- 2002 *Alaska Natives and American Laws* (Second Edition). Fairbanks: University of Alaska Press.

Chance, Norman A.

- 1987 Subsistence Research in Alaska: Premises, Practices and Prospects. *Human Organization* 46 (1): 85-89.

Dahl, J.

- 1989 The Integrative and Cultural Role of Hunting and Subsistence in Greenland. *Études/Inuit/Studies* 13 (1): 23-42.

- 2000 *Saqqaq: An Inuit Hunting Community in the Modern World*. Toronto: University of Toronto Press.

Dombrowski, Kirk

- 2007 Subsistence Livelihood, Native Identity and Internal Differentiation in Southeast Alaska. *Anthropologica* 49: 211-229.

Ellanna, L. J. and G. K. Sherrod

- 1984 The Role of Kinship Linkages in Subsistence Production: Some Implications for Community Organization. *Technical Paper* No. 100. Juneau, Alaska: Alaska Department of Fish and Game, Division of Subsistence.
- Ellen, R.
 1988 Foraging, Starch Extraction and the Sedentary Lifestyle in the Lowland Rainforest of Seram. In T. Ingold et al. (eds.) *Hunters and Gatherers 2: Property, Power and Ideology*, pp. 117–134. Oxford: Berg Publishers.
 1994 Modes of Subsistence: Hunting and Gathering to Agriculture and Pastoralism. In T. Ingold (ed.) *Companion Encyclopedia of Anthropology: Humanity, Culture and Social Life*, pp. 197–225. London: Routledge.
- Ember, Carol R. and Melvin Ember
 1988 *Anthropology* (Fifth Edition). Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall international, Inc.
- Fienup-Riordan, Ann
 1983 *The Nelson Island Eskimo: Social Structure and Ritual Distribution*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Freeman, M. M. R.
 1992 Environment, Society and Health Quality of Life Issues in the Contemporary North. In R. Riewe and J. Oakes (eds.) *Human Ecology: Issues in the North* (Occasional Publication Series No. 30), pp. 1–10. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute and Faculty of Home Economics.
 1993 The International Whaling Commission, Small-type Whaling, and Coming to Terms with Subsistence. *Human Organization* 52 (3): 243–251.
 2005 “Just One More Time before I Die”: Securing the Relationship between Inuit and Whales in the Arctic Regions.” In N. Kishigami and J. M. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67), pp. 59–76. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Gombay, N.
 2005 The Commoditization of Country Foods in Nunavik: A Comparative Assessment of Its Development, Applications, and Significance. *Arctic* 58(2): 115–128.
- 本多俊和 (スチュアートヘンリ)
 2005 「民族文化としての採集狩猟活動——イヌイトの事例から」本多俊和 (スチュアートヘンリ)・大村敬一・葛野浩昭編『文化人類学研究——先住民の世界』pp. 81–96, 東京: 放送大学教育振興会。
- Hitchcock, R. K., K. Ikeya, M. Biesele and R. B. Lee eds.
 2006 *Updating the San: Image and Reality of an African People in the 21st Century* (Senri Ethnological Studies No. 70). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Howard, Michael C.
 1986 *Contemporary Cultural Anthropology* (Second Edition). Boston: Little, Brown and Company.
- 市川光雄
 1982 『森の狩猟民——ムブティ・ピグミーの生活』東京: 人文書院。
 1997 「環境をめぐる生業経済と市場経済」青木保ほか編『岩波講座 文化人類学2 環境の人類誌』pp. 133–161, 東京: 岩波書店。
 1998 「森の民の生態と自然観——アフリカ, ムブティ・ピグミーの事例から」*Tropics* 8 (1/2): 119–129。
- 池谷和信
 1996 「生業狩猟から商業狩猟へ——狩猟採集民ブッシュマンの文化変容」田中二郎・掛谷誠・市川光雄・太田至編『続自然社会の人類学——変貌するアフリカ』pp. 21–49, 京都: アカデミア出版会。
 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』(国立民族学博物館研究叢書4) 大阪: 国立民族学博物館。
 2005 「東北マタギの狩猟と儀礼」「日本の狩猟採集文化の生態史」池谷和信・長谷川政美編『日本の狩猟採集文化——野生生物とともに生きる』pp. 150–173, 京都: 世界思想

- 社。
2007 「カラハリ狩猟採集民における生業と分配——危機に対する戦略としてのモラル・エコノミー」『アフリカ研究』70: 91-101。
- Ikeya, Kazunobu
1993 Goat Raising among the San in the Central Kalahari. *African Study Monographs* 14 (1): 39-52.
1996a Road Construction and Handicraft Production in the Xade Area, Botswana. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 22: 67-84.
1996b Dry Farming among the San in the Central Kalahari. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 22: 85-100.
- 池谷和信・長谷川政美
2005 「日本の狩猟採集文化の生態史」池谷和信・長谷川政美編『日本の狩猟採集文化——野生生物とともに生きる』pp. 1-18, 京都：世界思想社。
- Ingold, Tim
1988 Notes on the Foraging Mode of Production. In T. Ingold et al. (eds.) *Hunters and Gatherers I: History, Evolution and Social Change*, pp. 269-287. Oxford: Berg Publishers.
2005 A Manifesto for the Anthropology of the North. In Sudkamp, Anne (ed.) *Connections: Local and Global Aspects of Arctic Social Systems* (Topics in Arctic Social Sciences 5), pp. 61-71. Fairbanks: international Arctic Social Sciences Association (IASSA) and University of Alaska, Fairbanks.
- 煎本 孝
2007 「北方研究の展開」煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題——北方研究からみる』pp. 4-30, 京都：世界思想社。
- Irimoto, T.
1981 *Chipewyan Ecology: Group Structure and Caribou Hunting System* (Senri Ethnological Studies No. 8) Osaka: National Museum of Ethnology.
- Irimoto, T. and T. Yamada ed.
1994 *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Kancewick, M. and E. Smith
1991 Subsistence in Alaska: Towards a Native Priority. *University of Missouri Kansas City Law Review* 59 (3): 645-673.
- Keesing, Roger M.
1976 *Cultural Anthropology: A Contemporary Perspective*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Kelly, Robert L.
1995 *The Foraging Spectrum: Diversity in Hunter-Gatherer Lifeways*. Washington, DC: Smithsonian Institution Press.
- 岸上伸啓
1994 「北米におけるイヌイットおよびユピックに関する文化人類学的研究の動向と現状について」『人文論究』58: 53-105。
1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』東京：弘文堂。
1999 「イヌイットの青年・中年男性の生業離れについて——カナダ・ヌナヴィクのアクリヴィク村の事例を中心に」『民博通信』86: 67-87。
2001a 「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理——ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』70: 29-52。
2001b 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について——毛皮交易とその影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3): 293-354。
2002 「18-20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会組織」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』（国立民族学博物館調査報告 No. 34）pp. 39-50, 大阪：国立民族学博物館。
2003 「カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 No. 46）pp. 101-129, 大阪：国立民族学博物館。

- 2005 「カナダ極北の先住民民族イヌイット」岸上伸啓編『世界の食文化 20 極北』pp. 121-159, 東京: 農村漁村文化協会。
- 2007a 「環境人類学」綾部恒雄編『文化人類学 20 の理論』pp. 197-212, 東京: 弘文堂。
- 2007b 「クジラ資源はだれのものか—アラスカ北西部における先住民捕鯨をめぐるポリティカル・エコノミー」秋道智彌編『資源人類学 8 資源とコモンズ』pp. 115-136, 東京: 弘文堂。
- 2007c 「イヌイットの経済」綾部恒雄編『講座 世界の先住民民族—ファースト・ピープルズの現在 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』pp. 101-113, 東京: 明石書店。
- 2007d 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都: 世界思想社。
- 2007e 「北方先住民の社会経済開発—カナダ・イヌイットの場合」煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題—北方研究からみる』pp. 126-149, 京都: 世界思想社。
- 2007f 「カナダ・イヌイットの文化的アイデンティティとエスニック・アイデンティティ」煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』京都: 京都大学学術出版会。
- 2008 「「はまる」立場から カナダ・イヌイット社会における社会経済開発—地域社会の経済論理と近代経済学の葛藤」高倉浩樹編『地域分析と技術移転の接点: 「はまる」「みる」「うごかす」視点と地域理解』(東北アジア研究シリーズ No. 9) pp. 13-64, 仙台: 東北大学東北アジア研究センター。
- Kishigami, Nobuhiro
- 2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No. 53), pp. 171-192. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.
- 2005 Co-Management of Beluga Whales in Nunavik (Arctic Quebec), Canada. In N. Kishigami and J. Savelle (eds.) *Indigenous Use and Management of Marine Resources* (Senri Ethnological Studies No. 67), pp. 121-144. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 口蔵幸雄・野中健一・須田一弘・須田和代
- 1997 「移住と生業戦略—インドネシア, セラム島の農村における生業活動と食物利用」『国立民族学博物館研究報告』22 (2): 425-459。
- 葛野浩昭
- 1992 「極北民族サミのすみわけラップランドのトナカイ遊牧民と定住漁撈・狩猟民」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学—環極北地域の文化と生態』pp. 211-235, 京都: アカデミア出版会。
- 1997 「環境の「近代化」と先住民の生存—北欧の先住民民族サーミを中心的事例に」青木保ほか編『岩波講座 文化人類学 2 環境の人類誌』pp. 189-219, 東京: 岩波書店。
- Langdon, S.
- 1984 *Alaska Native Subsistence: Current Regulatory Regimes and Issues*. Anchorage: Alaska Native Review Commission.
- 1991 The Integration of Cash and Subsistence in Southwest Alaskan Yup'ik Eskimo Communities. In N. Peterson and T. Matsuyama (eds.) *Cash, Commoditisation and Changing Foragers* (Senri Ethnological Studies No. 30), pp. 269-291. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Laughlin, W. S.
- 1968 Hunting: An integrating Biobehavior System and Its Evolutionary Importance. In R. B. Lee and I. DeVore (eds.) *Man the Hunter*, pp. 304-320. Chicago: Aldine Publishing Company.
- Leacock, E. and R. Lee
- 1982 Introduction. In E. Leacock and R. Lee (eds.) *Politics and History in Band Societies*, pp. 1-20. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, Molly
- 2002 The Cooler Ring: Urban Alaska Native Women and the Subsistence Debate. *Arctic Anthropology* 39 (1/2): 3-9.
- Lee, Richard

- 1999 Hunter-Gatherer Studies and the Millennium: A Look Forward (And Back). 『国立民族学博物館研究報告』 23 (4): 821-845.
- Leed, Anthony
1976 Economics and Subsistence. In D. E. Hunter and P. Whitten (ed.) *Encyclopedia of Anthropology*, pp. 138-140. New York: Harper & Row, Publishers.
- Lonner, T.
1980 Subsistence as an Economic System in Alaska: Theoretical and Policy Implications. *Technical Paper No. 67*. Anchorage: Alaska Department of Fish and Game, Division of Subsistence.
- ロット＝ファルク, E.
1980 『シベリアの狩猟儀礼』 田中克彦・糟谷啓介・林正寛訳, 東京: 弘文堂。
- 松井 健
2000 「マイナー・サブシステム論」 未来開拓大塚プロジェクト事務局編『アジア・太平洋の環境・開発・文化』 pp. 23-35, 東京: 東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室。
2007 「生業資源とその所有——カール・マルクス『先行する諸形態』にならって」 松井健編『資源人類学 6 自然の資源化』 pp. 317-347, 東京: 弘文堂。
- 松園万亀雄
1962 「ソヴェト民族学における〈経済・文化型〉および〈歴史・民族誌的領域の概念〉」 『社会人類学年報』 3 (3): 73-82。
- 松山利夫
1994 『ユーカリの森に生きる——アボリジニの生活と神話から』 東京: 日本放送出版協会。
1996 『精霊たちのメッセージ——現代アボリジニの神話世界』 東京: 角川書店。
- Moran, Emilio F.
1982 *Human Adaptability: An Introduction to Ecological Anthropology*. Boulder, Colorado: Westview Press.
- Nash, J.
1994 Global Integration and Subsistence Insecurity. *American Anthropologist* 96 (1): 7-30.
- 野林厚志
2002 「台湾原住民の狩猟法——日本統治時代の資料から」 佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』 (国立民族学博物館調査報告 No. 34) pp. 215-230, 大阪: 国立民族学博物館。
2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』 東京: 御茶の水書房。
- Nuttall, M.
1992 *Arctic Homeland: Kinship, Community and Development in Northwest Greenland*. Toronto: University of Toronto Press.
- 大林太良
1991 「極北・亜極北文化史における熊祭——その歴史民族学的研究」 大林太良『北方の民族と文化』 pp. 195-223, 東京: 山川出版。
1997 「北太平洋地域の神話と儀礼における鮭」 大林太良『北の人 文化と宗教』 pp. 141-160, 東京: 第一書房。
- 大村敬一
2002 「カナダ極北地域における知識をめぐる抗争——共同管理におけるイデオロギーの相克」 秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海——水産資源管理の人類学』 pp. 149-167, 京都: 人文書院。
2007 「生活世界の資源としての身体——カナダ・イヌイトの生業にみる身体資源の構築と共有」 菅原和孝編『資源人類学 09 身体資源の共有』 pp. 59-89, 東京: 弘文堂。
- オズワルト, W. H.
1983 『食料獲得の技術誌』 加藤晋平・禿仁志訳, 東京: 法政大学出版局。
- Otterbein, Keith F.
1977 *Comparative Cultural Analysis: An Introduction to Anthropology* (Second Edition). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Pluciennik, Mark
2001 Archaeology, Anthropology and Subsistence. *Journal of Royal Anthropological Institute*.

7(N.S.): 741–758.

Québec.

- 1991 *James Bay and Northern Québec Agreement and Complementary Agreements*. Québec: Les Publications du Québec.

佐々木史郎

- 1991 「アムール川下流域とサハリンにおける経済・文化類型と歴史・民族誌的領域——レーヴィンとチェボクサロフの『経済・文化類型』と『歴史・民族誌的領域』の再検討」『国立民族学博物館研究報告』16(2): 261–309。
- 1992 「シベリアの生態系と文化——多彩な環境への適応」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学——環極北地域の文化と生態』pp. 133–160, 京都: アカデミア出版会。
- 1996 「北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人」東京: 日本放送出版協会。
- 1998a 「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟」『民族学研究』63(1): 3–18。
- 1998b 「クラスヌイ・ヤール村の狩猟採集産業の行方——株式会社民族狩猟企業「ビキン」の挑戦」佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』pp. 163–202, 東京: 慶友社。
- 2002a 「開かれた系としての狩猟採集社会の研究」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 No. 34) pp. 5–14, 大阪: 国立民族学博物館。
- 2002b 「東アジア・北太平洋地域の狩猟採集文化研究の新しい視野を求めて」佐々木四郎編『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』(国立民族学博物館調査報告 No. 33) pp. 5–20, 大阪: 国立民族学博物館。

Sasaki, S.

- 1994 *Economic-Cultural Types and Historical-Ethnographic Regions in the Lower Amur River Basin and Sakhalin Island*. In Irimoto, T. and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp. 403–414. Tokyo: University of Tokyo Press.

佐々木史郎編

- 2002a 『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 No. 34) 大阪: 国立民族学博物館。
- 2002b 『先史狩猟採集文化研究の新しい視野』(国立民族学博物館調査報告 No. 33) 大阪: 国立民族学博物館。

佐藤宏之編

- 1998 『ロシア狩猟文化誌』東京: 慶友社。

Searles, Edmund

- 2002 *Food and the Making of Modern Inuit Identities*. *Food and Foodways* 10: 55–78.

Shannon, Kerrie Ann

- 2006 *Everyone Goes Fishing: Understanding Procurement for Men, Women and Children in an Arctic Community*. *Études/Inuit/Studies* 30(1): 9–29.

Smith, Eric Alden

- 1991 *Inujuamiut Foraging Strategies: Evolutionary Ecology of an Arctic Hunting Ecology*. New York: Aldine De Gruyter.

スタルツェフ, A. F.

- 1998 「ウデへの狩猟活動と狩猟習俗」森本和男訳, 佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』pp. 209–254, 東京: 慶友社。

Statistics Canada

- 2006 *Harvesting and Community Well-being among Inuit in the Canadian Arctic: Preliminary Findings from the 2001 Aboriginal Peoples Survey: Survey of Living Conditions in the Arctic* (Catalogue No. 89-619-XIE). Ottawa: Social and Aboriginal Statistics Division, Statistics Canada.

Stern, Pamela

- 2000 *Subsistence: Work and Leisure*. *Études/Inuit/Studies* 24(1): 9–24.

Stevenson, Marc

- 1996 *Indigenous Knowledge in Environmental Assessment*. *Arctic* 49(3): 278–291.

スチュワード, J. H.

- 1979 『文化変化の理論——多系進化の方法論』米山俊直・石田絳子訳, 東京: 弘文堂。

スチュアートヘンリ (本多俊和)

- 1993 「極北民族の食生活」『ヴェスタ』15: 14–25。

- 1996 「現在の狩猟採集民にとっての生業活動の意義—民族と民族学者の自己提示言説をめぐって」スチュアート・ヘンリ編『採集狩猟民の現在—生業文化の変容と』pp. 125-154, 東京: 言叢社。
- 高倉浩樹
2008 「生業文化類型と地域表象—シベリア地域研究における人類学の方法と視座」守山智彦編『講座 スラブ・ユーラシア学 第2巻 地域認識論—多民族空間の構造と表象』pp. 175-201, 東京: 講談社。
- 田口洋美
1992 『越後三面山人記—マタギの自然観に習う』東京: 農山漁村文化協会。
1994 『マタギ—森と狩人の記録』東京: 慶友社。
1998 「ロシア沿海州少数民族ウデへの狩猟と暮らし—毳罽を中心とした狩猟の技術と毛皮交易がおよぼした影響をめぐって」佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』pp. 81-156, 東京: 慶友社。
1999 『マタギを追う旅—ブナ林の狩りと生活』東京: 慶友社。
2002 「ロシア極東アムール流域と東シベリアにおける先住民の狩猟漁撈活動」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 No. 34) pp. 165-214, 大阪: 国立民族学博物館。
- 田中二郎
1984 「生態人類学」綾部恒雄編『文化人類学 15 の理論』pp. 183-201, 東京: 弘文堂。
- 手塚 薫
2005 「近世におけるアイヌの生活様式の多様性—アイヌ研究の新たな展開」『日本の狩猟採集文化の生態史』池谷和信・長谷川政美編『日本の狩猟採集文化—野生生物とともに生きる』pp. 100-149, 京都: 世界思想社。
- 出利葉浩司
2002 「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について—毛皮交易の視点から」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 No. 34) pp. 97-163, 大阪: 国立民族学博物館。
- Turnbull, C.
1965 *Wayward Servants: The Two Worlds of the African Pygmies*. New York: Natural History Press.
- Tyrrell, Martina
2007 Sentient Beings and Wildlife Resources: Inuit, Beluga Whales and Management Regimes in the Canadian Arctic. *Human Ecology* 35: 575-586.
- Usher, P. and G. Wenzel
1988 Socio-Economic Aspects of Harvesting. In R. Ames, et al. (eds.) *Keeping on the Land*, pp. 1-52. Ottawa: Canadian Arctic Resources Committee.
- 渡辺 仁
1977a 「生態人類学序論」渡辺仁責任編集『人類学講座 12 生態』pp. 3-29, 東京: 雄山閣出版。
1977b 「アイヌの生態系」渡辺仁責任編集『人類学講座 12 生態』pp. 378-405, 東京: 雄山閣出版。
- 渡辺 仁編
1977 『人類学講座 12 生態』東京: 雄山閣出版。
- Watanabe, H.
1972 *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure*. Tokyo: University of Tokyo Press.
1973 *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure* (American Ethnological Society Monograph 54). Seattle: University of Washington Press.
1994 The Animal Cult of Northern Hunter-Gatherers: Patterns and Their Ecological Implications. In T. Irimoto and T. Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp. 47-67. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Wenzel, G. W.
1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.
1999 Traditional Ecological Knowledge and Inuit: Reflections on TEK Research and Ethics.

- Arctic* 52 (2): 113–124.
- 2002 Hunter-Gatherer Subsistence: A Canadian Inuit Perspective. A Paper read at the 9th International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS9), Edinburgh Conference Centre, Heriot-Watt University, Edinburgh, Scotland.
- Wenzel, G., G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami
- 2000 Introduction: Social Economy of Modern Hunter-Gatherers: Traditional Subsistence, New Resources. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies, 53), pp. 1–6. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Willerslev, R.
- 2007 *Soul Hunters: Hunting, Animism, and Personhood among the Siberian Yukaghirs*. Berkeley: University of California Press.
- Willmott, W. E.
- 1961 *The Eskimo Community at Port Harrison, P. Q.* (NCRC-61-1). Ottawa: Department of Northern Affairs and National Resources, Northern Coordination and Research Centre.
- Winterhalder, B. and E. A. Smith (eds.)
- 1981 *Hunter-Gatherer Foraging Strategies: Ethnographic and Archeological Analyses*. Chicago: The University of Chicago Press.